令和元年度

全国公共図書館研究集会

（児童・青少年部門）

報告書

研究主題 『子どもとともに読書のよろこびを分かち合おう』

期日　令和元年１１月２８日（木）・２９日（金）

場所　島根県民会館　大会議室（松江市殿町１５８）

主催　公益社団法人日本図書館協会

令和元年度全国公共図書館研究集会（児童・青少年部門）実行委員会

主管　島根県立図書館

令和元年度全国公共図書館研究集会（児童・青少年部門）

研究主題　『子どもとともに読書のよろこびを分かち合おう』

１　趣　旨

子どもの読書活動を推進していく上で、子どもを取り巻く人の存在はとても重要です。図書館職員をはじめ、教員、保育者、子どもの読書活動ボランティア、そして最も身近な存在である保護者などが、子どもとの読書の時間を楽しみながら、それぞれの人生において読書がより豊かなものになるよう取り組まなければなりません。

メディアの急速な広がりや子どもの読書推進に係る担い手の育成など様々な課題が山積するなか、読書がもたらすよろこびを分かち合うために、私たちに何ができるか考えていきます。

２　主　催

公益社団法人日本図書館協会
令和元年度全国公共図書館研究集会（児童・青少年部門）実行委員会

３　主　管

島根県立図書館

４　後　援

島根県教育委員会
島根県公共図書館協議会
島根県図書館協会

５　期　日

令和元年 11 月 28 日（木）～29 日（金）

６　場　所

島根県民会館　大会議室（松江市殿町 158）

７　参加者

128 名（講師・事例発表者・実行委員会含む）

8　日程及び内容

日　時		種　別	内　容	講　師　等
11月28日（木）	12:00～13:00	受　付	―	―
	13:00～13:20	開会行事	―	―
	13:30～15:00	基調講演① よろこびを子どもと分かち合うために 今、私たちができること		ストーリーテラー 子どもと絵本ネットワークルピナス 代表 松本なお子
	15:00～15:15	休　憩	―	―
	15:15～15:45	事例報告1	光市立図書館の乳幼児サービスについて ～つながるサービスを目指して～	光市立図書館 司書　林由紀子
	15:45～16:15	事例報告2	倉吉市立図書館のヤングアダルトサービスについて	倉吉市立図書館 館長　山脇幸人 倉吉市立せきがね図書館 司書　小谷真央
	16:15～16:45	事例報告3	おはなしレストランライブラリー ～ひとりひとりに寄り添う図書館をめざして～	島根県立大学松江キャンパス おはなしレストランライブラリー 司書　尾崎智子
	16:45～17:00	事務連絡	―	―
	17:00～18:00	移　動	―	―
	18:00～20:00	交流会	―	―
11月29日（金）	9:15～ 9:40	受　付	―	―
	9:40～11:10	基調講演②	おはなしレストランへようこそ ～地域と大学・学生を絵本でつなぐ～	島根県立大学人間文化学部長 教授　岩田英作
	11:10～11:20	休　憩	―	―
	11:20～12:30	全体会	研　究　討　議 （パネルディスカッション） テーマ： 「子どもとともに読書のよろこびを分かち合おう」	コーディネーター： 島根県立大学人間文化学部長 教授　岩田英作 パネリスト： 光市立図書館 司書　林由紀子 倉吉市立図書館 館長　山脇幸人 倉吉市立せきがね図書館 司書　小谷真央 島根県立大学松江キャンパス おはなしレストランライブラリー 司書　尾崎智子
	12:30～12:40	閉会行事	―	―

・二日目の研究集会終了後、「都道府県立図書館児童サービス担当者会」（日本図書館協会主催）を島根県立図書館（松江市内中原町 52 番地）にて開催しました。

基調講演①

よろこびを子どもと分かち合うために　～今、私たちができること～

ストーリーテラー・子どもと絵本ネットワークルピナス　代表　**松本　なお子**

【はじめに】

私は30年以上にわたって図書館に勤務し、何よりも児童サービスをとても大事にしてきた。退職後は、非常勤講師をしながら大人の方々と一緒に勉強する一方で、ライフワークとして幼稚園と保育園を定期的に訪問し、子どもたちにストーリーテリングを聞いてもらうという活動をボランティアで行っている。

図書館で長年取り組んだ児童サービスは本当に楽しい仕事であった。今でも30年前の利用者の顔、その子たちが好きだった絵本やお話、あるいはその子たちのお母さんやお父さんとの交流の記憶がぱっと蘇ってくることがある。

そんなエピソードをお話させていただく。私は今、ある企業と共催で、パパママ一緒の赤ちゃん絵本教室というのを行っている。読み聞かせというととかく女性の参加が多くなるが、どうしても男の人、特にパパに参加してもらいたいとの思いで「パパママ一緒」というタイトルをつけている。そうすると本当にお父さんたちが来てくれる。少ない時でも7割、多い時には8割以上がお母さんとお父さんと赤ちゃんとで参加される。つい先日も双子を連れたお父さんがやってきて「僕のことを覚えてますか」と言われた。お父さんの顔を見ただけでは思い出さなかったが、お子さんの顔を見たら思い出した。それは、かつて8年間勤務した図書館に常連で来ていた男の子だった。パパになって自分のお子さんを連れて参加してくれたのだった。嬉しくて、2人で飛び上がって喜んだ。このほかにも、毎週お話会に来てくれていた学童の子と、職場の先輩後輩として再会したこともある。長い間仕事をしていると、一人の子どもというよりも、一つの家族の成長をみる機会がたくさんあった。中には、私の転勤先の図書館まで進学や就職の報告をしに来てくれる人もいた。

つくづく、児童サービスは楽しい仕事だと思う。それは非常に嬉しいことだが、私が嬉しい、楽しいだけでいいのか、私の自己満足でいいのか、という思いもずっと抱えてきた。そこで私は、活動するときに自分を戒めている。自己満足ではなく、本当に子どもたちに喜んでもらえて、子どもたちの育ちにつながることをしているかと。本日の参加者は図書館にお勤めの方が多く、教育関係の方やボランティアの方もいらっしゃるが、皆さん、子どもと本を結ぶ活動というものをしておられると思う。こういった活動をする際に、私はいつも本当に子どもたちの育ちにつながるか、次の4つのことを心に刻んで活動をしている。まず、子どもを知らなくてはいけない。そして、子どもの本を知らなくてはいけない。さらに、その両者を結びつけて、子どもに本を届けるのであるが、そのために必要な知識と技術もきちんと習得をし、磨いていかなければならない。それと同時に、私一人が活動するのではなくて、子どもの周りにいる、多くの大人に働きかけを行うようにしている。そのことを本日は皆さんにもう少し詳しくお話したい。

【子どもを取り巻く社会の変化】

開会行事で来賓の方々も言及されたように、子どもを取り

巻く環境は大きく変わっている。どう変わっているのか、やはりきちんと確認しておきたい。有名なエピソードなので長く活動をしている方はご存知かと思うが、1970年代の半ばにとても衝撃的な出来事があった。当時はまだ図書館があまりきちんと整備されておらず、児童サービスにもそれほど重きを置かれていなかった。そんな中、ある都市のお母さんたちが、市長に対して、子どもたちが自由に存分に利用できる図書館をつくってくれるよう訴えた。その時その市長は「本はなくても子は育つ、私は子どもの時に本なんか1冊も読まなかった」と言った。言葉にはしなくても、おそらく内心では「本なんか1冊も読まなくたって私は市長という要職を立派に務めている」と思っていたのではないか。市長の言葉は図書館で頑張ろうと思っていた私や仲間たちに大きな衝撃を与えた。自分たちのしようとしていることは本当に子どものためになるのだろうか。同じ頃、ある新聞記者からも、「そんなに子どもの本、子どもの本と頑張る必要があるのか。僕は中学までは本なんか1冊も読まなかった。野球少年で、専ら野球野球の毎日で、本を読み始めたのは高校になってからだった」と言われ、このことにもすごく衝撃を受けた。

私だけではなく、当時の図書館員は必死になって、本当にそうなんだろうかと考えた。そして、いろいろなところで研究や追及が行われ、段々とわかってきたことがある。

それは、「かつては子どもたちの周りに本がなかった。しかし、本のかわりに子どもを育てたものがどっさりあった。」ということ。多分これらを享受できたのは、私と同世代の人たちくらいが最後の世代だと思うが、絵本のかわりに子どもを育てたものとしてまずあげられるのが「子守歌」や「わらべうた」だ。わらべうたには、まだ首の座らないような赤ちゃんをあやすような「あやし歌」とか、もうちょっと体幹がしっかりしてきたら一緒に遊ぶ「遊ばせ歌」もあったし、子ども同士であるいは親子でやりとりをしながら遊ぶ「遊び歌」などもあった。そしてもう少し大きくなると昔話を語って聞かせる昔語りがあった。それから四季折々の遊びも、世代を超えた多様な人間関係もあった。本日は詳しく話す時間はないが、なんと私はこれらを全て受け取って育ったということが後になってわかった。子どもの頃、私の6つ下の妹がわらべうたや子守歌を歌ってもらっているのを羨ましく眺めていたが、考えてみたら、記憶にはなくても私だって歌ってもらったことがわかった。そして昔話もおばあちゃんから聞かせてもらっていたらしい。私は絵本の読み聞かせもしてもらわなかったし、子どものときに絵本などなかったが、実は、こういったものは存分に与えてもらっていた。そのことに気づき、改めて感謝した。

しかし、今の子どもたちはどうか。私は大学で教えるとき、わらべうたをやった経験や昔話を身近な大人に耳から聞かせてもらった経験がどのくらいあるか、学生に聞いている。20年ぐらい前は、「昔話を語ってもらった人は？」と尋ねると、ぱらぱら手が挙がっていた。しかし、20年を経た今は、学生が100人いても2人か3人しかいない。しかも、その2、3人もよく聞いてみると、大抵、お母さんがボランティアをしているとか保育士をしていると言う。おそらく普通の家庭では、わらべうたや昔語りといったものはほとんど消えかかっていると思われる。だが、これらが子どもたちの成長に非常に大きな役割を果たしてきたということが、今ではいろいろなところで言われるようになり、ブックスタートや乳幼児サービスにおいて積極的にわらべうたが取り入れられている。

子どもを取り巻く社会がどうやって変化してきたのかをもう少し見ていく。私が図書館に勤め始めたのが1973年である。その頃から漫画が大量に出版されるようになった。かつては漫画イコール子どもの読み物だったが、その頃から漫画を卒業しない人たちが増えてきた。電車やバスに乗ると、電車やバスの中で少年サンデーやマガジン、ジャンプなどを読みふけっている大学生、あるいはスーツを着た社

会人をよく見かけるようになり、私たちより上の世代は衝撃を受けた。80年代には、さらに大量の漫画が出てきた。それに加え、ファミコンゲームというものが出てきて、それは小学生、中学生はもちろん、大学生にも広がった。そして、90年代は犯罪や社会問題の低年齢化が問題になり、一部の人たちからは読書離れとの関連も指摘されていた。さらに2000年を過ぎ、2004年頃になるとパソコンが普及する。2004年のデータでは、家庭でパソコンを保有していた人は78%いた。親たちは、パソコンが使えるようになれば将来役に立つと考え、子どもにパソコンを買い与えたが、実際は88%がゲーム目的で使用されていた。その後はテレビゲームも増えていき、さらに携帯電話やインターネットなども普及した。子どもたちがITに慣れていれば将来役立つだろうという、親や大人たちの期待とは裏腹に、それらはほとんどが音楽を聴いたりゲームをするために使われている。今では、犯罪に巻き込まれる危険も増えている。

配布資料にはないが、過去31回分、30年間の子どもの読書調査の結果を示したグラフを見ていただきたい。この読書調査というのは、5月1カ月間に何冊本を読んだかを調査するものであり、サンプルは約2,000人と言われている。小学4年生から6年生が5月1カ月に読む冊数は2008年に11冊を超えている。おそらく小学1年生から3年生を抽出すればもっと上回るだろう。ところが中学になると突然1桁になる。そして高校生になると、限りなく1に近い数字になっていく。この調査結果から、どの子も小学生のときには読む、中学生になると読まなくなる、高校生になるとさらに読まなくなるということがおわかりいただけると思う。

そしてもう一つのグラフも見ていただきたい。これは5月1カ月間に1冊も本を読まなかったと回答をした不読者の比率だ。小学生が最も低く、大体10%で、最近は10%を切っている。おそらく小学校の1年生から3年生であれば限りなくゼロに近い数字になるはずだ。中学生になると、1998年から2000年前後は40～50%と多かったが、その後10%台に減っている。高校生も同様に、以前は不読者が60%を超えることもあったが最近は多少減って50%台で推移している。小学生の読書冊数が増えているということは、朝読書などの効果が考えられるが、ここで注目していただきたいのは、総じて年齢が上がるに従って読まなくなるということである。これは一体どう考えたらよいのか。もちろん、部活や勉強で忙しいということもあるかもしれないが、別の調査では、勉強の時間が減っているという結果も出ており、勉強だけのせいではないという気がする。

【不読者の増加と電子メディア】

さて、調査対象1カ月間に1冊も本を読まなかった不読者は、80年ごろから増加傾向で、2006年の調査では、小学生6%、中学生22%、高校生50%である。2018年の調査では小学生8.1%、中学生15.3%、高校生55.8%となっている。そして、電子メディアというのが、2004年頃から急速に家庭に普及している。その状況をまとめてみると、電子メディアは大人たちの期待とは裏腹に、主に娯楽を目的として使用されている。そして子どもたちは早い時期からメディア機器に囲まれ、長時間メディア機器と接触をしている。私は仕事柄、よく新幹線や電車に乗ることが多いが、車内で赤ちゃんをおとなしくさせようとして、スマホを見せている親に本当によく出会う。乳幼児向けのアプリを見せると赤ちゃんが集中して、ぐずったり泣いたりしないから助かるという、そういう面は確かにあって、それは一概に否定はできない。ただ、一部には、集中していることを喜んでいる親も見受けられるが、本当に喜ぶべきことなのかちゃんと考えてほしい。今、電子メディアの影響というのは全く無視できない状況にある。

ちなみに、私が図書館勤務を離れ、児童福祉関係の部署に異動し、発達障がい児の組織的な支援のシステム化

という業務に携わっていたときに出会った、精神科医や小児科医、保育士や保健師、福祉施設職員などの方々も、電子メディアの影響について非常に心配しておられた。ところで、日本小児科医会から、2004年に「子どもとメディアの問題に対する提言」というものが出ているが、ご存知だろうか？［会場に呼びかけ］残念ながら1割はいらっしゃらない。では、2015年に出た「子どもとICTの問題についての提言」というものは？こちらはさらに少ない。

これらの提言は、メディアというものを安易に与えず真剣に対処しよう、子どもたちにメディアリテラシーを育てようという内容であるが、どうしてもメディアに対するマイナスイメージを与えてしまうため、残念ながらメディアではあまり取り上げられなかった。だからご存知の方が少ない。保健師や保育士などの業界では情報ルートがあり、保健師はほとんどの方がご存知だが、保育士となると、年配の方はご存知でも、新しい方はほとんどご存知なかった。非常に重要なことが、実はきちんと行き渡っていない。もちろん一般的にお母さん、お父さんにも行き渡ってないし、皆さんのように子どもの本を専門にしている方たちのところにも行き渡ってない。それで、泣く子にスマホのアプリをぱっと見せて泣きやんだら、我が子に集中力や知恵がついたと、親が喜んでしまう。メディアが子どもに与える影響について、やはりきちんと現実の問題として受けとめなければ、子どもと本を結ぶというところがなかなかうまく機能しないのではないかと考えている。2004年の段階でも「子どもとメディアの問題に対する提言」では5つの提言ということで、できるだけテレビやビデオは見せないとか、テレビを見ながら、スマホをやりながらの授乳はやめようといったことを言っているが、ほとんど知られておらず、さらにまた2015年の提言も知られていなかったという現実を、私たちはきちんと受け止めて、始めなければいけないと思っている。

【今、子どもたちに必要なことは】

ではどうすればよいのか。今の子どもたちに必要なことは何か。もう一度既出のスライド「昔、本の代わりに子どもを育てたもの」を見ていただきたい。これらを通じて何を子どもたちが受け取ったかといえば、言葉と愛情である。だから、それをちゃんと取り戻してあげなければならない。今必要なことは、「ことばの力」をつけてあげることである。小学生のときにはたくさんの本を読むのに、高学年、そして中学生、高校生になるに従って読まなくなるということは、「ことばの力」が本当にはついていないからなのではないか。きちんとした言葉をかけてもらうことが不足すると、読解力というものがついていかないのではないか。最初のエピソードで紹介した市も、今では図書館、児童サービスともに充実し、すばらしい活動をしている。当時の市長にしろ、新聞記者にしろ、おそらく子どものときに多様な人間関係や豊かな自然の中で、わらべうたや昔語りや遊びなどから言葉や愛情を十分に受け取り、育ってきたに違いない。だから高校生になってから、あるいは大学生になってから突然読み始め、大人として必要な資料はきちんと読みこなすことができたのではないか。しかし、今の子どもたちはどうだろう。今、ほとんどメディア漬けとも言われている子どもたちは、小学校の低学年、中学年くらいまではまだ読むということが可能でも、その後中学生、高校生くらいで力尽きてしまっているというのが現状ではないか。やはりきちんとした言葉をかけてあげることが大切なのだ。ただし、それをスローガンでいうのは簡単だが、では具体的に何をするかとなると、ごく普通のお父さん、お母さんたちにとっては、とても難しい。そこで、有効な方法の一つとなるのが絵本の読み聞かせである。

絵本の読み聞かせは、もちろん家庭で行うことが一番だが、児童福祉関係の業務に携わるようになったとき、図書館に来ることができる子どもは幸せであり、そして幸せな子どもはほんの一握りに過ぎないのだということを思い知らさ

れた。図書館に来るというのは、まず親たちに理解があり、余裕があり、そして関心があるということである。ところがそうではない親、そうではない家庭も数多くあること、気持ちはあってもそれができない親もたくさんいることも、私は嫌というほど思い知らされた。私はそういった子どもたちにこそ、読み聞かせが必要であると考える。そして、読み聞かせというのは、親以外の大人にもできる、非常にすばらしいシステムである。

では子どもにとって読み聞かせというものはどういうものだろう。一言で言ってしまえば、先ほど申し上げたような、子守歌、わらべうた、昔話、人間関係、それからいろいろな多様な体験、そういったものをかなりのところで補ってくれるものだと考えている。

まず、自分の存在を認めてもらっているという満足感、それから自己肯定感というものが得られる。なお、小児科医の方々からは、この「自己肯定感」とか「愛着形成」という言葉がよく出てきた。そして、それが不足している子どもがどうも増えているような気がするとおっしゃっていた。具体的には、目を合わせない、言葉が遅い、表情が乏しい、喜怒哀楽の感情起伏が非常に浅いというような現象をとても心配されていた。次に、読み聞かせというものは、当然のことながら、字が読めなくても文学を味わい楽しむことができる。そして、自分では選べない絵本と出会うことができる。小学校の低学年まではたくさんの本が読めるのに、その後挫折してしまう子どもが多いのは、おそらく、選んだ本がうまく機能していないからなのではないか。絵本の読み聞かせは、まずやってあげるということがとても大事なことだと思っている。また、読み聞かせでは読み手の感性や理解力というものが、自然にその読み方に反映される。ただ文字を音声化するだけではなく、読み手は意識していなくても、その間の取り方やテンポなど、自分が受け取って楽しめたように、聞き手に楽しめるように読んであげるということが自然にできるようになる。そして読んでもらって楽しかったら、本と出会わせて楽しませてくれた大人への信頼感というものが育つ。だから、今改めて読み聞かせというものが求められている。全ての子どもたちに読み聞かせをしてあげてほしいと、私は切に願っている。

読み聞かせは、家庭で一番身近な大人に、毎日の暮らしの中で読んでもらうということが、本当に望ましいことであるが、さまざまな事情から、家庭で読み聞かせをしてもらえない子どもがいる。経済的な問題、親の健康の問題、子どもの健康の問題、それから障がいの問題など、いろいろな理由がある。でも、私は、全ての子どもは、どこかで大人に絵本を読んでもらう権利があると考えている。今、図書館や学校やいろいろなところで集団に対する読み聞かせが行われているが、それはとても大事なことである。

さらに言えば、せっかく読んであげるなら優れた絵本と出会わせてあげるということが、子どもにとってこれからを生き抜く大きな力となっていくと思う。私はいろいろなところでストーリーテリングをしたり読み聞かせをしたりしているが、まずは楽しんでほしいと思っている。そして同時に、生き抜く力を身につけてほしいと願っている。

【優れた絵本の力】

では、優れた絵本というものはどういうものかということを確認していきたい。優れた絵本というのは、まず、「本は楽しい」ということを教えてくれる。私は、楽しくない絵本は優れた絵本ではないと思っている。「優れた絵本」とか「良い絵本」と聞くと、堅苦しくてつまらないのではないかと思う人がいるが、つまらない絵本は良い絵本ではない。とにかく楽しいということを教えてくれる、楽しいという思いを味わわせてくれる、そういう絵本をまず子どもたちに与えてあげてほしい。その楽しかったという思いが、これからの読書能力を育て、そして読書習慣の基礎をつくっていく。楽しみから出

発するというのは素晴らしいこと。これがもし、楽しかったという経験もないまま、「あなたは読む力が劣っているから」とか、あるいは「1カ月に何冊くらいはせめて読むように」と強制されたら、ますます本を読むのがつらくなり、読書が嫌いになり、自分は本が嫌いなのだと自分自身を否定してしまうことになる。

もう一つ、優れた絵本は、絵本の中でさまざまな体験をさせてくれる。先ほど、子どもたちが多様な人間関係や豊かな自然の中でたっぷり遊ぶということがどんどん減っていると話したが、ゼロではない。ゼロではないその少ない実体験を補い、それを言葉で再確認できるのが優れた絵本である。そうして優れた絵本が子どもの言葉を育て、将来的に自分で読む力を育ててくれる。なぜそれが可能なのかといえば、優れた絵本というのは絵と文の相乗効果が高いため、絵の助けによって出来事や思いを言葉で捉えられるからである。しかも優れた絵本には、非常に的確でシンプルな言葉が使われている。優れた絵本を読む経験を積み重ねることで次第にことばの力がつき、絵の助けを借りずに理解して楽しめるようになっていくのである。「ことばの力」があるというのは、よく想像力が豊かとか心の豊かな子など、抽象的に表現されることがあるが、生き抜く力、理解力、想像力、判断力、コミュニケーション能力、こういったいろいろな能力の基礎となるのが「ことばの力」である。

優れた絵本と出会わせてあげるにはどうするか。絵本と一口に言っても、いろいろなジャンルがある。おもなものとしては、創作物語絵本、昔話絵本、科学絵本、赤ちゃん絵本などがあるが、それぞれのジャンルの中で最も質のよい絵本を選んでいただきたい。創作物語絵本なら創作物語絵本の中のこれぞというもの、昔話絵本、科学絵本、赤ちゃん絵本、どのジャンルにも長年読み継がれてきたものがたくさんある。長年読み継がれてきたということは、皆さんの先輩の図書館員たち、先輩の子どもたち、お父さんたち、お母さんたち、それからいろいろな読書活動をしてきた人たちが大切に選び抜いてきたということである。それはいわば、すぐれた文化遺産である。まずはやはりそれらを子どもたちに出会わせてあげていただきたい。

それともう一つは、創作物語とか昔話絵本など、ストーリー性のあるものは、ぜひ幸福な結末のものを選んでいただきたい。特に大勢に向けて読んであげるときには、いろんな発達段階、いろんな状況の子どもがいることを考慮に入れておいてほしい。子どもは、絵本を読んでもらっているときは、お話の中に入り込む。そして主人公がいれば、主人公と一緒になって出来事を体験する。主人公が何か困難な目に遭えば、それを一緒に乗り越えようとし、そして乗り越えたときの達成感、幸福感というものを共有する。もしそれが達成できず、非常に悲惨な結末が待っているとなると、子どもは主人公と同じようにダメージを受ける。

9歳、10歳くらいまでの子どもたちというのは、容易に空想の世界と現実の世界を行ったり来たりできると言われている。そしてその年頃までにたっぷりと空想の世界を楽しんだ子どもたちは、その後、だんだん物事を論理的に捉えたり、時系列で捉えたりすることができるようになる。そうすると、ここは空想の世界で捉えるのか、現実の世界で捉えるのかという判断が非常にうまくできるようになっていく。よく、絵空事のお話ばかり聞かせると、子どもたちが現実に対応できなくなるのではないか、と心配する人がいるが、全くそんなことはない。例えば、おままごとで考えてほしい。おままごと遊びを楽しむのは、幼稚園から小学校低学年くらいだろうか。子どもがおままごと遊びのときに、お花とか葉っぱとかでごちそうを作り、先生に「食べて」と持ってくる。先生がパクパクパクと食べるふりして、「ああ、おいしかった、ごちそうさま」と言うと、子どもは嬉しそうにする。そのときに「本当に食べなきゃだめ」とか、「食べてないのにどうしておいしかったかわかるの？」なんて言う子は一人もいない。そういうふ

うに、昔の子どもたちは、現実と空想の世界を上手に使い分けて楽しんでいた。でも、今はおままごと遊びをしない子どもが増えているそうだ。

大体10歳くらいを超えると、物事を論理的、時系列的に把握する力がついてくると言われているが、その前にたっぷりと空想と現実の混沌とした世界を味わった子どもは、それを上手に使い分けながら人生を生き抜いていくことができるといわれている。物語の中に入り込む10歳になる以前の子どもたちにとって、主人公が悲惨な結末にあうのは楽しいことではない。「またつらい思いをしたらどうしよう」と次に読んでもらうのをためらうだろう。だから、まずはたっぷりと楽しませるというのがいかに大切かということを、しっかりと心に刻んでやっていきたい。念のため、10歳だったのが11歳になったからよいということではなく、子どもにはそれぞれに成長の個人差があるし、一人の子どもでも行きつ戻りつしながら成長していく。自分の子どもであれば状態がわかるかもしれないが、集団のときにはやはり安全圏を狙い、小学生に集団で読み聞かせをするならば、必ず幸福な結末のものを選んでいただきたい。

そして、子どもの発達段階に合った絵本を選びたい。特に赤ちゃんの認識の発達段階は、個人差があるといっても大きな流れがある。それを知った上で選ぶということがとても大切になってくる。

それから、子どもを次の段階へ誘うということを意識する。絵本から読み物への移行期につまずく子どもが多いのは事実で、皆さんも実感しておられるのではないか。「ことばの力」を育てるために、質の良い絵本を選びたい。

ところで図書館の皆さんは、お薦めの絵本のリストを作っているだろうか。今は、本屋にはありとあらゆる絵本が揃っていて、カラフルで大人の目を惹くような絵本もたくさんある。どれを選べばよいか迷っている親は多い。そんなときは、まずは、図書館や関係団体がつくっているお薦めの絵本リストを参考にしてみては、と申し上げている。ということで、もしお薦めの絵本リストを作っていない図書館はぜひ作ってほしい。子ども時代に出会わなかったら損、と言えるような、これぞという絵本を選び抜き、数は多くなくても、「選び抜いた絵本のリスト」を用意してあげるのは非常に大事なことである。

【優れた絵本とは】

では具体的に、優れた絵本とはどういうものかジャンル別にお話しする。子どもたちや私たちの先輩方が長年大切に読み継いできた選りすぐりの優れた良い絵本に共通する要素とは何かを考えていただければよい。

「おすすめしたい絵本と幼年童話の例」というプリントを見ながら聞いていただきたい。創作物語絵本は、子どもに、現実ではないもう一つの世界を体験させてくれる。主人公に同化し、主人公とともに出来事を体験し、子どもを主人公とともに成長させてくれる。そして、出来事や物事に関する的確なことばを子どもに与え、出来事のつながりを把握する力を育ててくれる。さらに、複数の視点で物事を見る目を極めて自然に養ってくれる。例えば『ペレのあたらしいふく』（エルサ・ベスコフ／作・絵　おのでらゆりこ／訳　福音館書店　1978）は、百年の長きにわたって読み継がれている、スウェーデンのエルサ・ベスコフの作品である。これはペレという男の子が羊を飼っていて、その羊の毛を自分で刈り

取って、それを二人のおばあちゃんのところに持っていって、すいてもらって紡いでもらって、そして自分で糸を染めて、お母さんに織ってもらって、仕立て屋さんに仕立ててもらって、ついに服ができ上がるという話だが、いわゆるハウツー本ではなく、ちゃんと物語になっている。冒頭の部分を読んでみる。

“ペレはこひつじを　1ぴき　もっていました。そのこひつじを、ペレは　じぶんでせわし、じぶんだけのものにしていました。　こひつじは　そだち、ペレも　おおきくなりました。こひつじのけは、それはそれは　ながくなりましたが、ペレのうわぎはみじかくなるばかりでした。

あるひ、ペレは　はさみを　もちだし、こひつじのけを　みんな　かりとりました。“

というところから始まり、まずは一人のおばあちゃんのところに行き、子羊の毛をすいてくれるように頼む。おばあちゃんは、ペレの頼みを聞き入れるが、それだけではない。この後が大事で、「もしもおまえがその間にニンジン畑の草取りをしてくれるなら」とペレに言う。そこでペレは、おばあちゃんのニンジン畑の草取りをし、おばあちゃんは子羊の毛をすいてくれる。そして次に、ペレはすいてもらった毛を持って、もう一人のおばあちゃんのところへ行く。ペレは、毛を糸に紡いでくれるよう頼み、このおばあちゃんも、「紡いであげるとも、おまえがその間、私の牛の番をしてくれるなら」と言う。ペレはおばあちゃんの牛の番をし、おばあちゃんは毛を糸に紡いでくれる。その次は少し複雑で、難易度が高くなる。ペレがペンキ屋のおじさんのところに行って、「染め粉をください」と頼むと、「うちには染め粉はない」と言われてしまう。でも、おじさんは「おまえが船で雑貨屋まで行って、この銀貨でテレピンを一瓶買ってきてくれるなら、おつりでおまえの染め粉を買ってもいいよ」と言う。ペレは船をこいで雑貨屋に行ってテレピンを買い、おつりで染め粉を買って、そして自分で染める。その後、お母さんのところに行き、染めた糸で布を織ってくれるよう頼む。お母さんは「織ってあげるとも。もしおまえがその間、妹を見ててくれるのならね。」と言う。つまり、ペレが大人に何か頼むと、大人は「やってあげるとも、その間おまえが…」と、ペレが少し頑張ればできそうなことを言いつける。そしてペレはちゃんとそれをやり遂げ、最後にきちんと服ができ上がる。

“にちようのあさ、ペレは　あたらしいふくを　きて、こひつじのところへ　いきました。「あたらしいふくをありがとう！」「べーエーエー」と、こひつじはなきましたが、まるで　わらっているようでした。“

という、この最後の場面は、ペレが子羊にお礼を言うところであるが、その後ろに、今までペレがこの服を作り上げるまでに協力してくれた大人たちがずらりと並んでいる。ある文学者が、今の子どもたちにこそ、この本は必要と言っていた。

ここにみる豊かな人間関係というのは、ただ可愛がればよいのではないということがよくわかる。ペレの周囲には、ペレのことをよく知っていて、ペレが今どのくらいの成長段階にいるのかわかっており、その上でペレのために一肌脱いでくれる大人たちがいる。そして、この大人たちをペレも信用している。こういう世界が今、子どもたちにあるだろうか。残念ながら非常に不足しているとしか言えない。だからこそ、絵本の中でこういう体験をさせてあげることは、子どもがこれから世の中に出て、いろんな大人たちと交流するにあたり、とても大切なのではないか。

もう一冊、『こぎつねキッコ』(松野正子／文　梶山俊夫／絵　童心社　1985)を紹介する。「キッコ」という小さなキツネの女の子が主人公で、ある山に住んでいる。その山には幼稚園があるのだが、その幼稚園が大好きなキッコは、毎日かくれて様子を見ている。幼稚園が夏休みに入ると、キッコは幼稚園に行って今まで幼稚園の子たちがやっていたことを全部、まねをしてやってみる。ブランコをこいだり、教室でオルガンを鳴らしたり。そして、秋風が吹きはじめ、夏

休みが終わろうとする頃、キッコはちゃんと尻尾でお掃除をして、最後に葉っぱで折り紙を折って、机の上に置いておく。夏休みが終わって子どもたちが幼稚園に戻ってくると、きれいに掃除がしてあり、机の上に葉っぱで折った折り紙が置いてある。この一番最後のところがおもしろい。

“だれが きのはのあさがおを かざったり おそうじを してくれたのか、せんせいにも こどもたちにも わかりませんでした。

「オルガンで、〝こぎつねのうた〟が きこえたことが あったよ。」「せんせいは、ひかなかったわ。」

「やまから こぎつねが きたのかな？」

そんなことを いうこも いました。“

この場面で、幼稚園の子たちはキッコが来たことを知らない。しかし、読んでもらっている子は皆、キッコがしたことだと知っている。つまり、この本を読みながら、ただ主人公に同化するだけでなく、もう一つの視点で物語を見ることができる。こうして複数の視点で物事を見るということを、絵本は難なく経験させてくれる。もちろん、出来事のつながりについても、いま目の前で起きていることは、何かの要因が前にあったためで、そしてまた次の展開につながっていく、ということを理屈抜きで教えてくれる。これらは優れた物語絵本に見られる共通の要素であり、これが子どもたちにとっての一番の宝物となる。この『こぎつねキッコ』は、温かみがあって、個人的にも大好きな絵本である。キッコが幼稚園の様子を見に行くというちょっとした冒険をするとき、その後ろには必ず、心配そうにキッコの様子を見守るお母さんギツネが描かれているが、そのことが温かみを生んでいる。

【昔話（民話）絵本について】

次に、昔話絵本についてお話しする。昔話というのはもともと口承されてきた。そのため、昔話絵本は邪道で、語りで聞かせてこその昔話だと言われたこともある。でも、先ほどお話ししたように、今や、昔話を語りで聞かせてもらっている子どもは1％程度しかいない。これだけボランティアの人たちがいろいろな場でストーリーテリングなどの活動をしても、なかなか広まらない。私は、昔話というものは、もしそのままにしておいたら消えゆく運命だったところを、絵本という形をとったことで、次の世代に伝承される可能性が拡大したと考えている。それは素晴らしいことだが、やはり、選ぶ必要がある。

では昔話にはどのような特性があるだろうか。私には昔話にまつわる印象深い経験がある。私たちの時代は、司書課程に児童サービスの科目はなかった。青少年に対するサービスという科目はあったが、絵本のことや子どもの本のことは一切触れなかった。現場に出て突然、子どもという重要な利用者と向かい合うことになる。新人の頃、おはなし会をやるように言われたが、どうしてよいかわからない。あれこれ考え、いろいろな絵本を読んでいたが、とてもよく聞いてくれるときもあれば、大外れのときもあった。おはなし会を始めたばかりの頃は、図書館にちゃんとしたおはなし会の部屋などはなく、パーティションで区切ったフロアの一角で行っていた。そういう場所だと、いつ参加してもよいし、いついなくなってもよい。毎回30分間で、その日に用意した絵本を最後まで聞いてくれるときもあれば、途中からどんどん人数が減っていき、最後に一人逃げ遅れた子が下を向いて、終わるのをじっと待っているようなときもあった。みんなが最後まで聞いてくれるときと、人が減っていくときとでどういう違いがあるのかと、そのときに使った本を読み返すなどして随分勉強した。それで、子どもたちが最後まで残ってくれたのが昔話絵本のときだった。浜松市には当時、児童サービスの先輩がおらず、おはなし会の本の選び方を相談した名古屋の先輩から昔話絵本を薦められて読んでみたのだが、本当に子どもたちがついてきてくれた。どうしてなのかと不思議だったが、その後いろいろ昔話の勉強をして、

その理由がようやくわかった。

昔話はもともと口承されてきた。口承してきたのは、特別な知識と技術を持った人でも訓練をされた人でもない、ごく普通の人たちだった。どうしてごく普通の人たちが、小さいときに聞いたお話を何十年も経ってから自分の孫、あるいは子どもに語って聞かせることができたのか。また、少々理解が遅い子や、集中力に欠ける子も、昔話なら最後まで聞いてくれるが、どうして昔話は、読書の苦手な子でも理解できて楽しめるのか。それは昔話の特徴と大きく関わっていることがわかった。昔話は、「昔、あるところに」で始まる。つまり、時、ところ、人が不特定である。そして非常に骨太に語る。骨太というのは詳細な情景描写や内面描写をせず、出来事をスピーディに語る。前へ前へとスピーディに語って、主人公の幸福な結末に向かう。ストーリー展開もパターン化されている。主人公は幸福な結末を迎える。それから、大体3回、もしくは2回の繰り返しが多用される。それから、とても極端に語る。また、しばしば残酷な場面が出てくる。残酷な場面があると言って昔話を敬遠する人もいるが、よく気をつけてみると、ちゃんと伝承されてきた昔話というのは、残酷な場面を語っていても、決して具体的な描写はしていない。そして、昔話には先人の生き抜く知恵がメッセージとして込められている。子どもは昔話をよく聞いてくれるという事実は先に気づいていたが、10年、20年後にようやくその理由つまり、昔話にはこのような特性があり、それゆえであることがわかってきた。なお、「昔話にはメッセージが込められている」というとき、このメッセージを「教訓」と捉える人がいるが、決してそうではない。教訓ではなく、生き抜く知恵である。そこを間違えると戦前戦中の戦意高揚の道具になってしまうので、それを間違えないように気をつけたい。

骨太に、そして極端に、必要な事だけが語られている典型例として、絵本『おおきなかぶ』(内田莉莎子／再話　佐藤忠良／絵　福音館書店　1966)を見ていく。

“おじいさんが　かぶを　うえました。「あまい　あまい　かぶになれ。おおきな　おおきな　かぶになれ」”

このとき、子どもから、かぶを一つしか植えていないと疑問を口にしたり抗議を受けたことのある人はいないだろう。かぶは一つで十分なのだ。なぜなら、このかぶがいかに大きくなるかというところに興味が集中すればよいからだ。そして、かぶはどんどん大きくなり、あっという間にこの大きさになる。

“「あまい　あまい　かぶになれ。　おおきな　おおきな　かぶになれ」”

と言うと、甘く、とてつもなく大きなかぶができる。極端この上ない。そして、余分なことは一切描かれていない。おじいさんとかぶだけ。最初の場面も、おじいさんとかぶと、おじいさんの家族がいるであろう家が描かれているだけで、ほかには畑も牛小屋も、何か果物の木が植えてあるといった描写も一切ない。必要なことだけを描くということが最後まで貫かれている。だから昔話の中でも、いちばん最初に子どもたちが理解して楽しむのはやはりこの絵本だということがとてもよくわかる。

それから『三びきのやぎのがらがらどん』(マーシャ・ブラウン／絵　せたていじ／訳　福音館書店　1965)。これも子どもたちが好きな絵本で、私もどれだけお世話になったかわからない。昔話の特徴を備えていて、たいへんわかりやすい。まず、時、ところ、人が不特定で、骨太に語られる。

“むかし、三びきの　やぎが　いました。なまえは　どれも　がらがらどん　と　いいました。　あるとき、やまの　くさばで　ふとろうと、やまへ　のぼっていきました。“

話はこのように始まる。山へ登って行った。理由は太るため。つまり最後は太らなければならない。『おおきなかぶ』にも同じことが言える。「甘い甘いかぶになれ、大きな大きなかぶになれ」と言うと、ちゃんと大きなかぶができる。そして『三びきのやぎのがらがらどん』も、見事トロルをやっつけ

て、

“やぎたちは　とても　ふとって、うちへ　あるいてかえるのも　やっとのこと。”

ここを読むと、「本当だ」「デブ」などと子どもたちが口にする。

“もしも　あぶらが　ぬけてなければ、まだ　ふとっているはずですよ。そこで――　チョキン、パチン、ストン。”

こうして話は終わる。この絵本では、大きいやぎがトロルをやっつける場面にも注目してほしい。残酷な場面を語るけれども描写はしない。トロルが、「きさまを食ってやる」と言うと、大きいやぎが予告をする。

“さあこい！　こっちにゃ　二ほんの　やりが　ある。これで　めだまは　でんがくざし。おまけに、おおきな　いしも　二つ　ある。にくも　ほねも　こなごなに　ふみくだくぞ！”

言っていることばは非常に残酷だ。どんな修羅場が待っているのかと思うと、

“そして　トロルに　とびかかると、つので　めだまを　くしざしに、ひづめで　にくも　ほねも　こっぱみじんにして、トロルを　たにがわへ　つきおとしました。”

このシーンの絵は、まるでジグソーパズルをぱっと蹴散らすように散らばして、そして突き落としている。もちろんやぎは返り血も浴びていないし、トロルがうめき声を上げることも、助けてくれと命乞いをすることもない。残酷な場面を語っていても、文章も絵も、具体的な描写はしていない。

『おおきなかぶ』も『三びきのやぎのがらがらどん』も、絵本になっていなければ、日本の子どもたちがこんなに楽しめなかったのではないか。例えばここに登場する北欧のトロル。皆さん、トロルと聞いて何を思い浮かべるだろうか？もしここでムーミンを思い浮かべたら、お話は全く違ったものになる。ノルウェーの子どもたちなら、トロルと言えばこのトロルをイメージできるかもしれないが、日本の子どもたちにはできない。しかし、絵本を見れば、こんな恐ろしいものが橋の下にいたら一体どうやって渡るのか、と必死になる。だから、絵本というのは、聞くだけでは理解できなかった海外のお話を、より楽しめるということにもつながっているのではないか。この点も、絵本の素晴らしさだと思う。

【科学絵本や赤ちゃん絵本について】

科学絵本というのは、随分前から良いものが出版されているが、まだ認知度が低い。一般のお父さんやお母さんたちに紹介すると、こんな本があったのかと大変驚かれる。科学絵本というと、何かを教える、知識を増やす、と思われている方が多いが、そうではない。科学絵本というのは、まず楽しさがあり、その楽しさとともに見る力、感じる力、考える力、つまり科学的な心というものを育ててくれる。具体的には、身近な題材を子どもの視点で捉えて理解させて楽しませる。質の高い絵や写真で、子どもの理解を助けてくれ、子どもの好奇心や興味をさらにかき立て、視野や興味の幅を広げてくれる。科学絵本によって知識を与えるというよりも、知る驚きや、知る喜びを味わわせてあげたい。

例えば、皆さんもよくご存じの『みんなうんち』（五味太郎／作　福音館書店　1992）。読み聞かせで子どもがとても喜ぶ。もちろん、喜ぶから読んであげるのはとても大切だが、これは実にすごい絵本である。

“おおきい　ぞうは　おおきい　うんち
ちいさい　ねずみは　ちいさい　うんち
ヒトコブラクダは　ひとこぶ　うんち
ふたこぶらくだは　ふたこぶうんち
これは　うそ！“

科学絵本なのに、冒頭からうそで始まる。これがおもしろい。そして次から次に展開していく。魚も、鳥も、虫も、みんなうんちをする。いろんな動物、いろんなうんち、いろんな形、いろんな色、いろんなにおい。そして次のポイントが、ここ。

“へびの　おしりはどこ？

くじらの　うんちは　どんなの？“

と書かれているのに答えがない。そうするときっと、「お父さん知ってる？」「いや、知らない」とか、「鯨のうんち見たことある？」など、会話や発想が広がる。それから、うんちの方法がいろいろ出てきて、最後に、

“いきものは　たべるから

みんな　うんちをするんだね“

こんなに生き物の多様性と同一性というものをうまくあらわした本はほかにない。理屈ぬきに、自分のうんち、鳥のうんち、鯨のうんちなどに思いをめぐらす。私はこの絵本を1977年頃に月刊誌で読み、ヘビのお尻や鯨のうんちのところでは、答えを言わないって何て不親切な本だろうと思った。それが、つい最近沖縄の美ら海水族館に行ったとき、ジュゴンを見ていたら、水槽の中で、どばっとうんちをした。あっという間に水槽が汚れた。見ていた人はみんな、「うわっ」とか「汚い」などと騒いだ。ジュゴンも鯨も哺乳類だ。私は、三十年来の疑問の答えをとうとう見ることができたと、とても嬉しかった。このように、科学絵本は、知っていることであっても、改めてその意味を感じさせてくれたり、あるいは、見ることができないものを感じさせてくれる。

もう一冊『ぼくのいまいるところ』（かこさとし／著　太田大輔／絵　童心社　1988）を紹介する。最初に、「僕の今いるところはどこでしょう」と言うと、子どもたちは、「え？何を読むんだろう」という反応をする。「僕が今いるのはここです」、「ここってどこですか？」と続き、「おうち」と答える。すると、そのおうちがある町、その町がある場所、その場所のある国、そして日本列島、それから太平洋とどんどん広がっていき、地球が出てくるあたりまでは、割合、子どもたちの認識のなかにあり、まだ具体的にとらえられているようだが、まだその先がある。

“その　ちきゅうの　まわりを、つきが　ぐるぐる

まわって　います。ちきゅうは　たいようの　まわりを

ぐるぐる　まわって　います。

（途中省略）

ぼくや　あなたは、この　すばらしく　おおきな

だいうちゅうの　なかに　すんでいるのです。“

自分が暮らす世界の奥深さと果てしなさに子どもたちはしーんとなる。そして一気に収束に向かう。

“そうです。だいうちゅうの　なかの、ぎんがけいの

ほしの　あつまりの、たいようけいの　なかの、

ちきゅうの　うえの、にっぽんの　くにの、ふじさんの

みえる、たかい　タワーの　ある　おおきな　まちの、

となりの　ちいさな　まちの　なかの、ぼくの　うちの、

その　にわに　ぼくは　いま　いるのです。ここが

ぼくの　いま　いる　ところです。さあ　あなたの　いるところは　どこですか。あなたや　きみのいま　いる

ところは　どこでしょう。“

これを、あるボランティアが、たぶんわからないだろうと思いつつも、年長さんの孫に読んであげたら、その子は不思議そうな顔をして聞いていた。しかしその後、何度も何度も、読んでほしいとせがんだそうだ。何だかよくわからないなりに、彼の琴線に触れるところがあったのだろう。

以上のように、絵本にはいろいろなジャンルのものがあるので、まずはその中の一番良いもの、長い間図書館員や親たちが選び抜き、ずっと大切に読み継いできたものを、ぜひ子どもたちに読んであげていただきたい。

赤ちゃん絵本は、愛されている心地よさを与えてくれて、愛着形成とか自己肯定感の獲得につながるということが一番大切だ。物語絵本とか科学絵本とは多少異なり、赤ちゃんとのコミュニケーションに役立つ本である。そして、繰り返し読むことによって、赤ちゃんの認識や言葉の獲得を助ける。ことばの力をつけるというよりも、言葉をかけてもらう嬉しさ、楽しさを味わわせ、教えてくれるのが、赤ちゃん絵本で

ある。だから、赤ちゃんへの読み聞かせは身近な大人しかできない。赤ちゃん向けのおはなし会はいろいろあるが、たとえ赤ちゃんが聞いてくれても聞いてくれなくても、赤ちゃんを連れてきた大人に対してアピールすることが大切だ。図書館員やボランティアにできるのは、赤ちゃんにとって最も身近な大人を支援することである。

【絵本の次に幼年童話を】

次に、幼年童話についてお話する。この幼年童話までは、自分で読ませるのではなく、ぜひ読み聞かせをしてほしい。幼年童話の例を挙げると、『いやいやえん』とか『もりのへなそうる』とか『おしいれのぼうけん』などがある。『いやいやえん』や『もりのへなそうる』は、5歳児、6歳児に特有の物事の捉え方とか言語というものが反映されている。だから、主人公に共感しやすいし、出来事をイメージしやすい、いわばおままごとの世界だと受け止めても良いかもしれない。厚い本の形をしているが、挿絵が多いため、イメージする力をしっかりと育ててくれる。これは自分で読ませるのではなく、読んであげる本である。こういった幼年童話を味わうことによって、その先に待っている『エルマーのぼうけん』のようなファンタジーや、さらには冒険物語、歴史物語など、児童文学の名作中の名作といわれているものにつなげていくことができる。

ただし、幼年童話は出会わせ方が非常に難しい。『いやいやえん』にしても『もりのへなそうる』にしても、厚さだけをみれば、この厚さに手を出す子どもたちというのは、早くても小学校の中学年である。ところが中を開いてみると、いきなりチューリップ保育園が出てきて、この保育園を舞台に繰り広げられる幼児向けのお話だということがわかり、がっかりする。幼年童話は、読んであげれば4歳からでも、あるいは5歳からでも十分楽しめるし、この年代だからこそ楽しめるということを積極的にアピールをする必要がある。中には『くまの子ウーフ』のように、読んであげても楽しめて、もうちょっと大きくなってから自分で読んでも楽しめるものもある。だがこの『いやいやえん』や、リストにはないが、『くまのプーさん』は、厚い本で字も小さいが、読んであげれば5歳、6歳の子どもたちがおなかを抱えて笑いながら喜ぶ。ただし『プー横丁にたった家』は、ペーソス（哀愁）が漂ってくるので、もう少し大きくなってからの方が良いが、前半の『くまのプーさん』までは、現実ではないもう一つの世界で遊ぶ力を身につけていれば、年長から小学校の低学年くらいの年代の子どもが一番楽しめる。

【読み聞かせの場について】

実際に読み聞かせをするときの注意点についても整理をしておく。読み聞かせの場には不特定多数の子どもに読む場合と特定の子どもたちに読む場合がある。図書館などでは不特定の子どもたちに読み聞かせをする。児童館や学校などでも、聞きたい子だけが参加するような場合は、不特定多数の子どもたちが来る。そして家庭や保育園、幼稚園、小学校の朝読書であれば、特定の子どもたちが参加する。不特定の子どもに読み聞かせをするときと、特定の子どもたちに読み聞かせをするのとでは、絵本の選び方が違う。

まず、不特定の場合、子どもが自分の意思で参加するため、最初から聞く気で来てくれるというメリットがある。聞く気で来ているはずなのに、途中で帰られたとしたら、よほど選び方が良くなかったということになる。また、図書館や児童館などでは、複数の人がローテーションを組んで行うため、複数の読み手の好みとか感性を受け取ることができる。そして、親も参加できるので、読み聞かせの意義や優れた絵本、読み聞かせの方法などについて、親に対して発信をしていくことができる。デメリットとしては、当日にならないと、何歳くらいの子が来るか、何人来るかもわからない。常連さ

んが来るのか、初めての子が来るのか予測ができないため、プログラムを組むのに苦労する。この場合、プログラムは予め決めておくが、必ず予備の絵本を用意する必要がある。それから、子どもたちの反応はその場でしか把握できないことが多い。もし失敗したら、次から来てくれないかもしれない。私は常に、一期一会と思って行っていた。

では、特定の場合はどうか。特定の場の典型は家庭で、他には保育所や幼稚園、あるいは小学校の朝読書なども当てはまるが、こちらもメリットとデメリットがある。メリットは、読み手と聞き手の間に親密感や信頼関係があることだ。少し失敗したとしても、次の機会で補うことができるし、いつも一緒にいる親なら、事後のフォローも可能である。不特定多数の場合、それはできない。そして、聞き手の年齢、人数、経験の予測がしやすい。しかし、デメリットがあることも承知しておかなければならない。自分の意思に反して聞かされるという人たちもいる。「聞きたくない」、「今日は聞く気分じゃない」、「この本好きじゃない」などと、意思に反して聞かされると感じる子どもたちがいることも十分肝に銘じて、誠意を尽くすしかない。また、子どもが出会う絵本というのが、どうしても読み手の好みに偏りがちになる。さらに、反応を過剰評価しやすい。特に保育園、幼稚園では、先生が読むと子どもたちはそれだけで嬉しいので、非常に盛り上がるが、本を喜んだのか、先生の存在そのものを喜んだのかわからなくて、次第に尻すぼみになることがある。不特定と特定、どちらの場合も、メリットとデメリットがあるということを承知しておいていただきたい。

【より多くの人たちと連携を】

本日お集りの皆さんはそれぞれ、子どもと本をつなぐ活動に取り組んでおられると思う。本日一番多いのは図書館員の方だろうが、先ほど申し上げたように、図書館に来ることができるのは、ほんの一握りの恵まれた子どもたちだけである。そうではない子どもたちは大勢いるし、そうではない子どもたちにこそ、読み聞かせというものを体験させてあげてほしい。そのためには、まず、家庭に働きかける。お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんに働きかける。さらに、行政機関の職員にも働きかける。本日も参加しておられるが、保育士、教員、保健師、公民館職員、放課後児童会や児童福祉施設の指導員など、いろいろな立場の方がいる。そういう人たちとも連携をし、いろいろな場で取り組んでもらうのが良い。また、こういった機関とボランティアとをつなげるということを図書館が行っても良いし、たまには図書館員が出向いても良い。出向くのが無理でも、おすすめの絵本をセットにして本だけでもお貸しするとか、いろいろな連携の仕方がある。こういった人たちと、ぜひ連携をしてほしい。連携の仕方にもいろいろあり、それぞれの自治体によっても事情が違うとは思うが、この輪を広げることで、より多くの子どもたちに、より優れた絵本を届けられるようになっていく。保育園の時には先生が熱心で良い本を読んでくれたのに、小学校に入ったら全くしてもらえなくなったというようなことにならないように、成長途上で切れ目なく支援を行い、子どもたちが良い絵本と出会う機会を継続して受けられるようにしていただきたい。

もう一つ、連携が素晴らしいのは、それぞれの方々が持っている専門性や経験を共有できる点にある。それぞれの分野でできることは限られている。図書館の方なら心当たりがあるかもしれないが、児童サービスやおはなし会がどんなに大事だと思っていても、いつも児童のカウンターにいて、おはなし会を全て自分がやるというわけにはいかない。経験年数が増えればそれなりの会議だとか研修だとか、いろいろな業務も増えていく。しかし、いろいろな立場の人たちと連携することにより、常に、子どもたちに良い出会いというものを保障してあげられる。

最後に中村柾子さんが書かれた『絵本はともだち』という

本を紹介をしたい。我々はどうしても、読むことに一生懸命になってしまい、一冊一冊の絵本が子どもたちにとってどういう意味を持つのかということをおろそかにしがちであるが、私はこの中村柾子さんの本を、時々ぱらぱらと読んでは確かめている。中村柾子さんは、保育士として長く勤められ、保育園の園長にもなられた。退職後は、保育士の養成の仕事に携わり、今はリタイアして講演活動などをされている。保育の現場に何十年もおられ、保育の現場で、一冊一冊の絵本を、子どもたちと本当に大切に楽しんできた方である。この著書を読んでいると、一冊の絵本を読んで、クラスの子どもたちがどんなだったかとか、その後子どもたちにどのような反応が見られたかとか、遊びにどんな変化があったかとか、そんなことが臨場感とともに非常に詳しく書かれている。これを読むたびに私は、自分が子どもたちと絵本を楽しむ場所を持っている幸せを感じる。全部読み通さなくても、自分の好きな絵本の項目だけでも読んでみていただきたい。

私は、こういった子どもと本をつなぐ活動をするのに大事なのは、やはり、まず皆さんが楽しむということ、そして楽しみを分かち合うことだと思う。そして、楽しみとともに、できるだけ多くの子どもたち、つまり図書館に来ない子どもたち、親にやってもらえない子どもたちにこそ、何とかして読み聞かせを届けてあげてほしいとお願いして、私の話を終わらせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。

事例報告1

光市立図書館の乳幼児サービスについて ～つながるサービスを目指して～

山口県光市立図書館 司書 **林 由紀子**

【はじめに】

私は、平成2年4月から図書館司書として勤め始め、 29年になる。当時は、まだ図書館の電算化はされていない手貸しの時代だった。目録カード作成が大事な業務で、書名、著者名、分類別でカードケースに入れ込むという作業がとても大変だった。職員6人のうち司書は私だけで、新人ではあったが、いろいろな仕事を任せてもらった。当時の館長から、「ぜひ児童サービスをお願いしたい」と言われ、そこから児童図書館員を志した。

【光市について】

光市は、本州の西の端、山口県の東南部、周南工業地帯の東部にある。北西部には島田川、北東部には田布施川が流れており、両河川を中心にまとまった平野が広がっている。瀬戸内の温暖な気候と豊かな自然環境に恵まれ、白砂青松の室積・虹ヶ浜海岸や象鼻ヶ岬など、風光明媚な海岸部は瀬戸内海国立公園に、また、青々とした森の石城山を中心とした山間部は石城山県立自然公園に、それぞれ指定を受けている。平成16年10月に、隣接する大和町と合併した。面積約92平方キロメートルのコンパクトなまちで、平成31年3月末で人口は51,081人である。旧大和町は、初代内閣総理大臣である伊藤博文の誕生地でもある。

光市は、「おっぱい都市宣言」、「光市自然敬愛都市宣言」、「光市安全・安心都市宣言」の3つの都市宣言をしているが、「おっぱい都市宣言」について説明しておきたい。光市では、昭和51年から母子保健活動の重点目標として母乳栄養の普及に努めており、母乳栄養率の高い地域として、県内外の注目を集めるようになった。母乳育児推進に始まった活動は、栄養法や子どもの年齢にかかわらず、胸でしっかりと子どもを抱きしめ愛しむふれあいの子育て「おっぱい育児」の推進へと広がっていった。より豊かな子育てを目指し、市全体での活動として取り組んでいる。平成6年3月には、光市制施行50周年記念事業の一環として、「おっぱいまつり」を開催した。「おっぱい育児」と、大切な心を育むまちづくりの推進のため、平成7年3月、光市議会において「おっぱい都市宣言」が決議された。「おっぱい育児」は、全ての人が子どもをしっかり胸に抱く、手で触れる、見守る、語りかける、子どもの声に耳を傾けるといった、愛情豊かなふれあいの子育てを意味し、その理念は合併後も引き継がれている。

【光市立図書館について】

光市には、光井地区にある光市立図書館と、大和地区にある大和分館の2館がある。大和分館は、今年4月に新設された大和コミュニティセンター内への移転時に、分室から分館に名称を変更した。光市立図書館では、「市民の身近にある学びと憩いの拠点」を基本理念とし、市民参画による「市民図書館」、市民の課題や疑問に答える「コンシェルジュ図書館」、子どもの読書活動を推進する「子どもの読書活動支援図書館」、自然豊かで親しみのある「スローライフ図書館」を目指して運営している。平成30年度末の職員数は、光市立図書館が14人、大和分室が2人の計16人で、そのうち司書は5人いる。今年度は職員が1名増えて、17人となった。

光市立図書館は、昭和51年に現在の場所に開館した。築43年目で、施設の老朽化は否めない。第2水曜日の朝、乳幼児のためのおはなし会を2階奥の視聴覚室で行っている。室内をフラットにしてござを敷き、クッションマットを置いて会場にしている。ボランティアスタッフの方が会場づくりを手伝いながら、早目に来た常連の親子とおしゃべりをして、和やかな雰囲気づくりをしてくれる。このように、ボランティアスタッフの協力を得ながらさまざまな行事を実施している。平成30年度の行事は資料に掲載のとおりである。これまで図書館では、講演、講座を数回実施し、さらに勉強したいという方を対象に、より実践的な研修を行い、勉強会を発足させるという形でボランティアの養成をしてきた。「語りの会ひかり」、「わらべうたの会」、「絵本の読みあいグループ」、「エプパネ」という、エプロンシアターやパネルシアターの勉強をするグループなどがある。布絵本の製作もボランティアの募集を行い、「光布絵本グループにじ」が立ち上がった。平成25年度からは、本を書棚に戻すボランティアの希望者が数名おられたので、書架整理や配架、花壇整備や切り紙作成など環境美化の個人ボランティアの募集も始めた。そして、平成26年4月には、個人、団体でつくる光市立図書館ボランティア活動協議会が発足した。現在の登録者数は、個人15人、団体が9団体（72人）となっている。その方々が実行委員会となって図書館まつりを開催するなど、多彩な行事が行われている。

【光市子どもの読書活動推進計画について】

光市では現在、第3次光市子どもの読書活動推進計画に基づき、さまざまな取り組みを行っている。

第一次では、「豊かな『ことば』と『こころ』を育むために～」を基本理念とし、各施設、各課、ボランティア団体がさまざまな取り組みを実施した。

第二次の推進計画では、基本理念を「本との出会いをすべての子どもたちに」とし、市全体の活動とするため、ネットワークづくりを重視して、光市子どもの読書活動推進庁内委員会を設置した。毎年、目標を設定し、計画に基づく施策や取り組み状況の点検、評価を行っている。先ほど紹介した光市立図書館ボランティア活動協議会が発足したのも、読書活動団体のネットワーク化に取り組んだ結果である。

第3次推進計画では、家庭、地域、学校等がそれぞれお互いに連携し、社会全体で子どもの自主的な読書活動の推進に取り組むことを目指し、基本理念は「子どもの自主的な読書活動を支えるために」とした。学校図書館と市立図書館連携マニュアルの作成と活用、ブックスタート事業の推進が主な取り組みである。全ての子どもたちがあらゆる機会、場所において読書に親しめる体制を整えていきたい。

推進計画に基づく乳幼児に関わる取り組みとしては、赤ちゃん絵本コーナーの整備充実、乳幼児のためのおはなし会「ずくぼんじょ」の開催、来館おはなし会、出前おはなし会、出前講座、ブックスタート事業などを行っている。出前先は、幼稚園、保育園、子育て支援センター、産科病院などである。最近の例では、公益社団法人光市シルバー人

材センターから、「子どもを預かることがあるため、絵本の読み聞かせについて学びたい」と出前講座の依頼があった。これらの事業については、定期的な発信も行っていたが、それ以上に、関わったボランティアや参加者の口コミによって存在を広めていただいた。

【光市立図書館における乳幼児サービス】

次に、こうした乳幼児向けのサービスを始める経緯をお話しする。私が初めておはなし会を行ったのは平成4年9月12日だった。学校週5日制が導入された日である。その後、定期的なおはなし会としてスタートさせたのは翌年の平成5年4月からで、参加者はほぼ小学生だった。一人で約40分のプログラムを読み聞かせていたが、図書館でのおはなし会は、年々低年齢化が進んでいき、乳幼児のおはなし会を始める図書館も増え始めた。光市でも、選んでいたプログラムと参加者の年齢が合わず、プログラムを急遽変更することが増え、年齢別でのおはなし会を考えなければならなくなった。どんなスタイルで進めていくのかを模索していた時期に、わらべうたに出会った。ある研修会の夜の交流会で、わらべうた、手遊び、指遊びの部屋があり、正直、「図書館でわらべうた？」と思いながら参加したのだが、とても楽しかった。その楽しさが忘れられず、もっと子どもたちと遊びたい、わらべうたをもっと知りたいと思った。しかし、学びたいと思いつつ、気づけば数年が過ぎていた。それで、その研修会で知り合った団体に講師を依頼する手紙を出した。勢いだけで無理なお願いをしてしまったと思うが、聞き入れていただき、年に1、2回のペースで4年間、6回の講演と実践をしていただいた。そして、参加者に「わらべうたの勉強会を始めたいのだが」と声をかけたところ、2名の方が参加され、わらべうたの会が発足することになった。会の代表は私が勤めている。勉強会を勤務中に行うのは難しいため、夜、会員の自宅で行った。勉強会を発展させ、平成15年5月、図書館で乳児のためのおはなし会がスタートした。その後、対象月齢を変更しながら、平成22年4月に現在の乳幼児のためのおはなし会の形になった。乳幼児のためのおはなし会「ずくぼんじょ」は、毎月第2水曜日10時30分から11時30分まで開催している。6カ月から未就園の子どもとその保護者が対象である。そして会場の視聴覚室で、ボランティアさんたちが参加者親子を出迎え、参加した子の月齢を確認する。時間が来たら、会を始める。

“ずくぼんじょ　ずくぼんじょ
ずっきんかぶってでてこらさい
ずくぼんじょ　ずくぼんじょ
ずっきんかぶってでてこらさい“

会のはじめにこの歌を繰り返し歌いながら、親子の様子を見て、子ども一人ひとりとしっかり目を合わせていく。目が合ってニコッとする子、目が合って泣きそうな子、周りが気になって目が合わない子、反応はさまざまである。毎月のわらべうたのプログラムは決めてあるが、伝える順番などは、親子の様子を見ながら変えている。絵本も数冊用意しておいて、1冊か2冊を読み聞かせる。最後に、季節のわらべうたを歌って終わる。約30分間おはなし会を行い、その後は自由に交流する時間を設けている。スタッフも交えながらおしゃべりしたり、お手玉で遊んだり、ひたすら歩く子を見守ったり、子育ての悩みを聞いたりもする。うろうろする子は、スタッフがマンツーマンで見守り、お母さんが話しやすい雰囲気を作るようにしている。親子を見送った後、11時半から片づけ、振り返りと次回の確認をして、出前の依頼が来ている場合はその打ち合わせなどをしてから解散する。何もない部屋だが、参加者から、「気を散らさずにわらべうたや絵本に集中できるので良い」とか、「ボランティアさんたちと、子どものことではなく自分のことを話す機会があるのが嬉しい」などと言われたりする。信頼していただくと、喜びを感じ、さらにこちらも知識や技術を身につけ伝えていこうとやる気

につながる。光市立図書館のおはなし会は、当初から、わらべうたを中心とし、絵本は1冊か2冊、読み継がれているものを読むようにしている。わらべうたを勉強していくなかで、わらべうたは、乳児にとって「おはなし」だと学んだからだ。

瀬田貞二氏が、『幼い子の文学』(中央公論社　1980)の中で、次のように言っている。

“母親が子どもがまだ物心のつかないうちから歌う童唄のたぐい、子守唄のようなものが、いちばん大切で、児童文学の第一歩、その基本”(P58)

“小さいときから見事な言葉を聞いて育った人間は、やはり言葉に対しての感覚が鋭くなっていくでしょうし、また当然、その言葉が開いていく世界になじんでいくことになるでしょうから、その意味で童唄はとても大切だ”(P101)

しかし、今、わらべうたが十分に伝承されていない現状では、始めたいと思っても難しいのではないか。だからこそ、図書館でわらべうたを伝える意味があると思っている。乳幼児のためのおはなし会は、試行錯誤しながら現在の形となったが、妊娠期及び授乳期にわらべうたや絵本のことを伝えておく必要があるのではないか、伝えるにはどうしたらよいかと考え、マタニティ絵本教室を開催した。「教室」ではイメージが硬いという意見もあり、途中から「絵本カフェ」と改名し、お茶を飲みながら話を聞くという形にして、母子手帳の、受講したことを記録する欄に押せるように、スタンプも準備してみた。参加いただいた方からは、まずまず好評だったが、人数は少なく、1組だけということもあった。継続を検討していたところ、内容に目をとめてくださった産科病院からの依頼があった。担当者としては大いに喜んだが、これまで図書館と民間との連携はなく、どのように進めるべきかわからなかった。そこで、毎年「おっぱいまつり」を民間団体とコラボして開催している子ども家庭課と健康増進課の担当者にちょっと聞いてみることにした。図書館にいると他の部署と関わる機会が少ないが、庁内委員会が発足し、顔が見える関係になっていたことで連携も取りやすくなった。この、「ちょっと聞いてみるんだけど」はとても大事だ。こうして、平成25年8月に妊婦さんと新ママの絵本教室を、病院内ホールで開催することができた。素敵なチラシとホームページで宣伝していただき、お母さん自身が出産した場所という安心感もあって参加しやすかったのか、初回から20組の親子と妊婦さん6人が来場された。プログラムは赤ちゃん絵本の紹介、楽しみ方、わらべうたで子育て、メディアスタートについてで、そのときのアンケートには、わらべうたを知ることができてよかったとの声が多数あった。終了後、実際に絵本や布絵本を手に取る方や、わらべうたについての質問をする方もいた。図書館に行ったことがないという方も多く、私たちスタッフにとって、とても新鮮な経験だった。図書館の良いPRとなり、そこから「ずくぼんじょ」へ参加される方もある。また、子育て支援センターや幼稚園、保育園等での未就園児親子対象のおはなし会でもお会いするなど、出会う機会が増えることになった。それに伴い、いろいろな思いを伝えていただく機会も増え、こちらとしても気づきを得ることにつながった。例えば、「『もこもこもこ』が赤ちゃん絵本のリストにあるけれど、どう読み聞かせたらいいのかわからなかったが、実際に読んでもらって、子どもが聞いている姿を見て、初めてこの絵本のよさがわかった」と、随分後になって教えてくださったお母さんがおられる。図書館への来館は難しくても、子育て支援センター、幼稚園、保育園、学校で本と出会う機会をつくること、図書館の人や仕事を知ってもらうことが大切だと、実践していく中で気づいた。平成30年度、病院ホールでは、「ママとベビーのわらべうたあそび」、「たのしいおはなし会」、「妊婦さんと新ママの絵本教室」の3回を実施した。

今年の4月からはブックスタート事業が始まった。ブックスタート事業は1992年にイギリスで始まり、日本では2000年の子ども読書年を機に紹介され、2001年4月から12市町

村で本格的な活動が始まり、その後、全国に広がっている。光市のブックスタート事業は、親と子に本の魅力を伝えるとともに、読書を通して親子のふれあいを深め、子どもの健全な成長を図ることを目的としている。図書館、子ども家庭課、健康増進課が互いに連携を図り、母子保健推進員と協力して実施している。自治体としては遅いスタートとなったが、深いつながりのあるものにしていきたい。本だけではなく、人ともつながるように努めたいと思う。

光市立図書館では、子どもの成長段階に合わせた関わり方を考え、実践してきた。継続的におはなし会をしていく中で、子どもが小さいころに図書館と関わった親子の方が、図書館への信頼度も高いと気づいたためである。ある日、カウンターの奥にいると、小声で何か言いながら手を振る若いお母さんがおられ、近寄ってみると、私を「絵本の先生」と呼んでくれた。「絵本の先生」とは、なんと嬉しい呼び方だろう。この親子は「絵本カフェ」や「ずくぼんじょ」によく来てくれていたのだが、「子どもが3歳になりました」と嬉しそうに近況を伝えてくれた。女の子は「誰？」とお母さんに尋ねているが、お母さんが笑顔でお話をしている人、絵本を読んでもらった人らしいということで、すぐに信頼してもらえた。小学校へおはなし会に行くと、「保育園のとき、来てくれたよね」と言って、保育園、幼稚園で出会った子たちが、近寄って来てくれる。「小学生のときに好きだった『エパミナンダス』のお話が中学校でも聞けて嬉しかった」と書いてくれた中学生の男の子もいる。出前講座を行ったときには、親子で絵本やお話の楽しさを知った方がボランティアとして活動されるというケースにも出会った。「娘が2歳の頃、それまで絵本に見向きもしなかったので絵本は嫌いだと思っていたけれど、絵本を読んでもらったらじっと聞いていたので、その絵本のシリーズを全部買った。中学生になった今でも本をよく読む」とのこと。また、「読み聞かせやお話を語ってもらい、中学生のときには、職場体験で司書資格の取り方を教えてもらった。ついに司書資格を取ることができた」という、図書館が大好きな男の子のお母さんから道端で報告をもらったこともある。このような嬉しい報告があるので、実践はやめられない。

現在、私と10年目となる司書職員が兼務で児童サービスを担当している。2名になったとはいえ、祝日開館や時差出勤もあり、同じ仕事を一緒にする時間は余りない。効率化のために、分業化している仕事もあるが、一つ一つはここにつながっているということを示し、伝えながら後輩を育てていきたいと思う。

本日、縁あって、ここで報告をさせていただくことになり、改めて自館の児童サービスを振り返るよい機会となった。ご清聴ありがとうございました。

事例報告2

倉吉市立図書館のヤングアダルトサービスについて

鳥取県倉吉市立図書館　館長　山脇幸人

倉吉市立せきがね図書館　司書　小谷真央

【ヤングアダルトサービスの対象と目的】

ヤングアダルトサービスの対象は、中学生、高校生を中心とした世代である。倉吉市立図書館での利用者の実態も、当然、中学生や高校生が多いが、裾野はもう少し広く、小学生や、近くにある短大の学生、あるいは20代の大人の方などもたくさん利用されている。

また、倉吉市立図書館では、このサービスの目的として次の4項目を挙げている。

1)「読書の意義と図書館の存在の再認識(生きるために役に立つもの・ところ)」

2)「本との出会いによる夢や希望の拡大(進学・将来の職業選択に役立つ)」

3)「若い人同士の心地よい交流の場の提供」

4)「大人社会への参加の準備」

このうち特に、2番目を大事にしている。ヤングアダルト世代にとって、本との出会いが夢や希望の拡大、進学あるいは将来の職業選択に役立つものであってほしい。いろいろな本を読むことにより新たな知識や情報を収集し、疑似体験を通じて経験や知恵を獲得し、知識や情報を実生活に活用する方法を習得する。そのようにして生きる力を身につけてほしい。若い方の進学や将来の職業選択、つまり個々の利用者の幸福の実現に役立つことはとても大切なことだ。例えば、地方では、職業一つにとってみても最適な職業に偶然に出会うというのはまれなことである。チャンスが決定的に不足している。ある職業に適したずば抜けた才能を持っていたとしても、そのような職業があることがわからなければ、その職業に就くことはできない。中・高校生が自力でチャンスを作り出すことは困難であるため、周りの大人たち、特に図書館にそういうチャンスを作り出す大きな責任がある。中・高校生が大学や専門学校などに進学する、あるいは将来最適な職業を見つけ、そこに就職して夢や希望に近づいていく。そうした出会いを可能にすることができる社会教育施設が図書館であり、それが私たちの重要な役割である。

中・高校生はどうしても直接経験する機会が少ないし、私たち大人たちでも全てのことを経験することはできない。そこで、疑似体験することが非常に重要な意味を持つ。直接体験プラス疑似体験の積み重ねが、大人になって社会に出たとき、生きる力に結びついていくと考えている。

主な取り組みとしてスライドで紹介している項目のうち、今回はヤングアダルトコーナーの設置、コレクションの充実と、ヤングアダルトニュースの編集・発行について詳しく説明する。

参考までに、「倉吉市立図書館資料収集方針」「ヤングアダルト資料選定基準」、そして、今年度の「資料収集計画」をご覧いただきたい。どの図書館でもこんな流れで選書や、コレクションをつくるための基準がつくられていることと思う。今回、改めてこれらの資料を確認し、我が館のことながら古いと感じた。今の時代には不十分な部分もあるが、それぞれの内容を参考にしてほしいというより、毎年度このよう

な手順で資料収集の具体的な方針や計画を作っているということで紹介する。何となくイメージで選んでいては、望ましい蔵書やコレクションを作ることはできない。教育機関として、このような方針や計画を立て、それに基づいて資料を収集することが大切であるということを改めて述べておきたい。

次に、実際のヤングアダルトサービスについては、ヤングアダルト世代向けの図書館情報誌の作成を担当している小谷司書から報告してもらう。

【ヤングアダルトサービスについて】

ヤングアダルトコーナーは、倉吉、せきがねの両館に設置している。若者のニーズに合うように、進学、就職に関する図書や学習に役立つ図書、実用書、小説などを所蔵している。

せきがね図書館のヤングアダルトコーナーでは、利用者に書いてもらった「おススメ本メッセージカード」を書架に掲示したり、「ヤングアダルトノート」という、罫線がない真っ白なノートを置いて、趣味や興味のあること、イラストなどを書いてもらっている。こうしたメッセージカードやノートが、ヤングアダルト世代のコミュニケーションと交流の場となっている。職員も、このノートに図書館や本の情報を書いてPRを行っている。

これらに加え、倉吉、せきがね両館の全ての新着図書の表紙コピーを掲示して紹介している。以前、中学生から「新刊の表紙を見て予約をかけたい」という要望があり、それを受けて実施するようになった。今の若い世代は、本を選ぶポイントとして、本に使用されているイラストも注視しているようだ。

このほか、閲覧席の横にヤングアダルト世代向けの展示コーナーを設け、年に4回程度、テーマを決めて本の紹介を行ったり、職員手作りのボランティア募集のPOPを飾ったりしている。

せきがね館は、小さくて利用者との距離が近いので、効果的にヤングアダルトサービスを行うことができる。若い世代にとっては、大人の職員に話しかける際の抵抗感が少ないようだし、職員も利用者の意見を参考にいろいろ工夫することができる。小さい図書館だからこそ、利用者個人に合ったサービスを提供することができ、ヤングアダルト向け情報誌も作りやすい。なお、せきがね図書館は、小・中学校が近くにあり、館内でバスを待つ子どもたちもいて、地域の子どもにとっては親しみやすく安全で快適な空間でもある。そういう点でも分館は必要である。分館は本館の縮小版ではない。小さい図書館を各地に置くことによってより効果的なヤングアダルトサービスを行うことができる。倉吉市立図書館では、このような点を分館にしかできない役割だと考えている。

倉吉図書館のヤングアダルトコーナーで特に目立つのは、「進学・就職応援コーナー」である。その名のとおり、進学・就職に関する本を集めている。平成25年度以降、社会奉仕団体の倉吉グレートライオンズクラブから毎年ご寄贈をいただいている。これまでの寄贈図書の合計は574冊になる。選書は図書館職員が行っており、現在では、図書館費で購入したものを含め約700冊が「進学・就職応援コーナー」に並んでいる。進学・就職情報は、常に最新のものが必要なため、短い間隔で情報を更新することが不可欠だ。

図書館では十分な予算確保が困難であるため、地元の奉仕団体の支援は大変助かっている。

次に、倉吉図書館のPOP製作および掲示についてお話しする。POPは、職場体験に来てくれたヤングアダルト世代に作成してもらい、飾っている。POPによって図書を紹介することは、近年SNSが普及しているように、口コミによる影響を強く受けるヤングアダルト世代に適した方法だと思われる。

このように当館のヤングアダルトコーナーでは、地域の民間団体や中・高校生の協力により、新鮮な情報を提供し、利用者と本との出会いを創出している。

【YA世代向け図書館情報誌『雨のち晴れ』】

当館では、YA世代向け図書館情報誌『雨のち晴れ』を年4回発行している。主に、中・高校生のボランティアが製作している。見本を2部お配りしているのでご覧いただきたい。平成15年の夏号から発行を開始し、ちょうど16年が経つ。若者目線の情報発信ということに重きを置き、本や図書館、投稿作品を紹介するほか、鳥取県出身の人や倉吉市に関わるプロジェクトへのインタビュー、イベントレポート等の記事を掲載している。中・高校生が読書への関心を高めるとともに、地元への愛着を持つことを目的としている。また、同世代に自分の考えたこと、感じたことを伝えられる居場所、交流の場にするという役割もある。中・高校生は、部活や受験、文化祭の準備などで忙しい時期があるため、自由に無理のない程度で作ってもらっている。

『雨のち晴れ』は、読者もヤングアダルト世代であるため、館内で配布する以外にも市内の中学校や鳥取県中部の高校に無料配布している。学校図書館の司書やヤングアダルト世代の来館者から、「学校図書館に『雨のち晴れ』が張ってあり、読んでいる」という声をよく耳にする。学校以外にも、倉吉市の市役所やスーパー、駅、中・高校生が行きそうな文房具店などに『雨のち晴れ』を置いてもらっているし、図書館のホームページでも読めるようにしている。ちなみに『雨のち晴れ』というタイトルは、初代のボランティアが考えた。「今は雨が降っていても、後で晴れていく」ということで、みんなが前向きに生きていこうと思えるように名づけられた。また、思春期である中・高校生の移ろいやすい心もうまく表現されていると思う。

『雨のち晴れ』には、主に本の紹介、図書館行事の紹介、地域のイベントのレポート、ボランティアの紹介および募集、あとがき、さらに読者のオリジナルイラストや小説などの投稿作品の紹介ページがある。イラスト紹介ページ、イラストコーナーに関しては、「テーマを決めたほうが書きやすい」とボランティアからの意見があり、毎号異なるテーマを設定している。このような読者参加型のページをつくることにより、図書館が遠くて来館できない人も参加できるようにしている。

このほかには、特集記事として鳥取県出身の人へのインタビューや、市にかかわるプロジェクトへのインタビューを載せることがある。

鳥取県出身の人へのインタビューでは、小説家の桜庭一樹さん、平成20年の北京オリンピック代表にも選ばれた元バレーボール選手の山本隆弘さんをはじめ、鳥取県出身のさまざまな職業の方の記事を掲載した。

市に関わるプロジェクトへのインタビューの例として、まず「ひなビタ♪」のインタビューについて紹介する。「ひなビタ♪」というのは、5人のアニメキャラクターがバンドを組んでつくった曲を、実際にラジオやブログで紹介していくという音楽コンテンツである。そのアニメキャラクターが暮らす架空の町「倉野川市」は倉吉市がモデルとなっていると言われており、若者に人気の「ひなビタ♪」で地域を盛り上げようと、平成18年に「倉野川市」と倉吉市は姉妹都市提携を結んだ。架空の町との姉妹都市提携は全国初の取り組みだ。そこで、市の主管課である観光交流課と協力し、倉吉観光大使ともなった「ひなビタ♪」のキャラクターへのインタビュー

と、「ひなビタ♪」を生み出した株式会社コナミデジタルエンタテイメントの作曲家TOMOSUKEさんへのインタビューを行った。また、「ひなビタ♪」に関する本やCDも収集して紹介した。ほかにも、倉吉市教育委員会の生涯学習課が地元の刀に関する講座を開催する際に、講師の刀匠の先生にインタビューができるよう協力してもらうこともあった。当時のボランティアの中に、刀剣に興味を持つ子が数名いたからだ。インタビューはメールで行い、後日ボランティアたちは講座に参加し、刀匠の先生と一緒に記念撮影もしてもらった。もちろん、刀剣の本の紹介なども行った。山陰地方出身の銅版画家や造形作家さんの講座のときもメールでインタビューをさせていただいた。

インタビューは、地元の方々とも直接協力し合って行うこともあった。地域に関わるプロジェクトへのインタビュー事例では、地元で「あーとのおまつり」というイベントの際、若手フランス人アーティストが来日していたので、お祭りの実行委員たちと話し合い、簡単な英語を交えながら生インタビューを行った。このほか、「きみわた」の事例もある。「きみわた」とは、地元の企業が「2012年まんが王国とっとり建国」をきっかけに立ち上げたプロジェクトで、鳥取県の美しい自然や風土とキャラクターを写真やイラスト、小説などで融合し表現するというものである。その中で、地元のヤングアダルト世代が声優を務める「きみわた」キャラクターのドラマCDを出すことが決まったので、その声優たちにメールでインタビューを行った。

こういったインタビューを行うことは、ボランティア自身と、読者であるヤングアダルト世代の夢や希望を広げたり、興味がある取り組みと関わりたいという彼らの願望を実現することになるため、大事にしている。

【活動の中での交流】

次に情報誌の編集活動における交流の様子を紹介する。ボランティアたちは、編集活動の日はもちろん、一年に一度開催するボランティアの交流会や、ヤングアダルト活動日誌というノートでも交流ができる。また、インタビューやイベントで、さまざまな人とも出会い話をする。さらに、近年は、忙しいボランティアに合わせ、図書館とボランティアの間での連絡や記事作成を、メールやSNSで行うようにもなってきている。そのような交流の場で、自分の好きなことや流行っていることについて話し合いができ、そのうちに他人と接することも好きになっていくようだ。

『雨のち晴れ』をつくることで、さまざまないいことが生まれている。特集やインタビュー関連本で、ヤングアダルト世代に豊かな読書の世界を知ってもらえる。自分が住む地域を知るきっかけとなる。自分の世界や夢を広げることができる。図書館に行きたくなる。紹介した本が借りられる。学校で張り出され、本を読むきっかけとなる。若い世代間の会話のネタになる。さまざまな中高校生が編集に興味を持ち前向きになってくれる。

以前、人と関わるのが苦手という子が、唯一の友人に誘われてボランティアに入ってくれた。その子は、編集活動をしていく中で、「人と関わることができるようになり、前より苦手意識がなくなった」と言ってくれた。図書館が心の成長の場となれたと思い、とても嬉しかった。今現在も、ボランティアの中には、新しい環境に馴染むのが苦手という子がいる。この子は、「それでも編集がしてみたい」とボランティアに入ってくれたので、今後の成長を楽しみに見守っていきたい。

具体的な事例についての説明は以上である。

【課題と展望】

最後に課題と展望について述べる。当館は、平成13年に現在の地に移転新築して以来、ヤングアダルトサービスにも力を入れてきたが、まだまだ課題は多い。魅力的な書架づくりを常に追求していかなければならないが、予算は

限られている。十分良いものができているかというと、忸怩たる思いがある。課題として挙げた項目の中で、いち早く取り組む必要があるのは、地域の学校図書館、大学図書館との館種を超えた協力連携ではないだろうか。倉吉市立図書館でも、学校図書館との連携はまだ十分ではない。特に、学校図書館を実際に運営している司書教諭との連携が、システム的、組織的にはまだうまくいっていないので、このことに力を入れていきたいと考えている。県内でも定期的な連絡会を持っていたり、連携を補佐するコーディネーターを置いている図書館もある。そういった先進事例を参考にしながら良いものをつくり、充実した連携をしていきたいと考えている。

最後の項目で、若者を含めた市民、学校との協働を実現し、まちづくり活動への橋渡しをするという課題を挙げた。図書館というのは、資料提供を主たる業務として行っている。いろいろな新しい情報や知識を提供するということが大切だが、場を提供するということもとても大切だ。行政組織の中でも、図書館は特に、中・高校生が訪れて利用しやすい施設だ。役所の中を見回してもこのような施設はない。そういうところを生かし、先ほど報告したような、ヤングアダルトニュースの編集、あるいは蔵書点検をボランティアで手伝ってもらったり、職場体験学習を受け入れることにより、実体験をする場も提供することができる。こういう実体験の積み重ねで、社会に出たときに必要な「生きる力」が育まれれば、市や民間で進めているまちづくりへの参加や協力も期待できるのではないか。図書館は、読書を通して疑似体験をする場であるが、子どもたちの成長を助けたり、成長を支援する空間でもありたいと思っている。

これで倉吉市立図書館のヤングアダルトサービスについての報告を終える。

事例報告3

「おはなしレストランライブラリー　～ひとりひとりに寄り添う図書館をめざして～」

島根県立大学松江キャンパスおはなしレストランライブラリー　司書　尾崎 智子

【はじめに】

いま私が着用しているポロシャツは、おはなしレストランのユニフォームである。島根県立大学松江キャンパスでは、絵本の読み聞かせをする授業があり、学生が近隣の小学校や幼稚園を訪問する時も、全員がこのポロシャツを着る。本日はこの衣装でお話しをさせていただく。

ずっと話を聞き続けて皆さんお疲れだろうから、一緒に「ととけっこう」というわらべうたで遊んでみたい。ご存知の方は一緒に歌っていただきたい。では、両手をこのように、顔の前に出してほしい。

［わらべうた実演］

“ととけっこう　よがあけた　まめでっぽう　おきてきな
おはよう”

この「ととけっこう」というわらべうたは、学生が幼稚園を訪問して読み聞かせをするとき、最初に行っている。子どもたちは、このわらべうたを覚えていて、大きな声で歌ってくれる。そのかわいい姿を見ていると、「わらべうたっていいな、繰り返しするっていいな」と感じる。皆さんもぜひ、どこかで使ってみてほしい。

【おはなしレストランライブラリーについて】

おはなしレストランライブラリーは、島根県立大学松江キャンパスの中にある絵本・児童書専門の図書館である。平成22年に学内開放が始まり、平成23年の4月から一般開放が始まった。専任の司書は2名だが、学生もさまざまな形で活動に関わっている。絵本・児童書専門の図書館が大学の中にあるというのはとても珍しいことだが、本学では、絵本の読み聞かせの授業があるため、大学の中に絵本・児童書専門の図書館がつくられた。絵本の読み聞かせの授業は、保育士になる学生や図書館司書になる学生だけでなく、学科を問わず誰でも受講することができる。中には、子どもと関わることや人前に出るのが苦手な学生もいるが、絵本の読み聞かせ等で子どもたちと関わることによって、少しずつ意識が変わっていくのを見ることができる。

読み聞かせの授業風景をスライド写真でいくつか紹介する。

［スライドの上映］

これは、学生が読み聞かせをするための絵本を選んだり、読み合ったりしている様子。ブックトークをしている様子。授業時間外に来て、手遊びの練習などをしている様子。このようにして、学生は多くの絵本と出会っている。ここで、おはなしレストランの雰囲気を伝えるために動画を準備したので、そちらをご覧いただきたい。

［動画を上映する予定だったが、機材不調のため中断、以下報告を続けてもらう］

おはなしレストランライブラリーは、火曜日が休館日で、木曜日から日曜日まで一般開放を行っている。月曜日と水曜日の午前中はライブラリー内で授業を行い、午後は学内に開放をしている。司書は、木曜日から日曜日までは図書館業務を行う。月曜日と水曜日の午前中は授業のスタッフとして学生と関わり、午後は学生対応をしている。図書館業務と授業のスタッフとで仕事の内容は異なるが、経験したことが双方に活かせるため、日々、それぞれの仕事を大切にして過ごしている。

平成23年にオープンして以来、司書がどのような気持ちで利用者と関わってきたかをお話しする。まず、「声をかける、声を聞く」ということをとても大事にしている。というのも、1年目にこんなエピソードがあったからだ。当時、とても元気な子がよく来ていた。常に歩きまわったり何かを引っ張り出したりしていて、座っている姿を見たことがないほどだった。その子のお母さんはいつも眉間にしわを寄せておられて、怖くて話しかけることができずにいた。その頃ライブラリーでは、絵本のPOPを10枚書いてもらったら学生手づくりの商品をプレゼントするという「おはなしマラソン」という取り組みをしていて、その男の子にやってみるかと声をかけたら、「やるっ」と言った。そして、ものすごく集中して10枚のPOPを書き上げてくれた。その絵がとても素敵だったので、その子のお母さんに「とてもすてきな絵を描かれますね」と声をかけると、そのお母さんが初めて、それもとても素敵な笑顔を見せてくださった。その時、これからもこんな笑顔をたくさん見たいと思い、声をかけることの大切さを知った。

ライブラリーには、一回利用して、その後来られなくなる方も多い。また、「おはなしのじかん」という学生の読み聞かせの時だけ参加して、来られなくなる方もいる。しかし、司書の声かけ一つで何かを変えられるのではないかと思いながら日々過ごしている。というのも、本に全く興味がなかった子がご両親の辛抱強い働きかけによって本が大好きになるという例を、ライブラリーではたくさん見てきたからだ。司書が子どもに何か注意をするときでも、口で言うだけでなく、そこで子どもたちとちょっと触れ合うとか、初めて来られた方には声をかけて、また来たいと思ってもらうとか、そういうことを考えながら声をかけるように心がけている。

もう一つ、大事にしていることがある。それについてはこんなエピソードがある。土日によく来られるお母さんがいた。土日はご主人が仕事のため、いつもお母さんだけで2人の男の子を連れて来られた。このお母さんはいつも疲れておられたので、積極的に声をかけるようにしていた。ある日、本を返されるときに、「最近、時間に余裕がなくて読み聞かせはできないが、私がここに来たくて来ている」と、そのお母さんの方から話をしてくれた。私はその言葉がとても嬉しかった。ライブラリーは本を貸し出しする場所であり、本と出会ってもらいたいのはもちろんだが、こんなふうに保護者の方や子どもたちにとって元気の出る場所でありたいと思っている。

つい最近も、2歳の男の子を連れてよく来られるお母さんから、「子どもはかわいくてしょうがないけれど、いつも日中は子どもと2人きりで過ごしていて、ストレスを発散する場所がない。おはなしレストランで司書さんとお話しすることが唯一、元気になれる時間だ」と言われた。その言葉もとても嬉しかった。「おはなしレストランに行けば、司書とおしゃべりできて、絵本とも出会える」、とたくさんの方に思ってもらえるように、もうひとりの司書と共に、声かけと、雰囲気づくりを頑張っている。

【機械に頼らないレファレンス】

図書館司書としての業務では、機械に頼らないレファレンスというのを目指している。ライブラリーでは、開館当初から、「子どもたちの名前を呼んで声かけをする」ということを心掛けている。大体、来館3回目くらいで名前を覚えて、名

前を呼んであげられるようになる。名前だけでなく、好きなものや話したエピソード、誰と来られるかということも覚えるようにしている。誰と来られるかを覚えていてよかった事例がある。いつもお母さんと来ていた男の子が、初めてお父さんと2人で来た。お父さんがすごく緊張しておられたが、子どもに「〇〇君、こんにちは」と言ったところで少し緊張がほぐれた。それからお父さんに「初めまして」と声をかけて、「〇〇君はこういう絵本が大好きで、よくお母さんと読んでいますよ」と話をしたら、お父さんの緊張が一気にほぐれ、とても楽しそうに絵本を選び始められた。絵本にはまるお父さんは多いが、その方もそれからよく来られるようになり、来館3回目ぐらいで絵本にとても詳しくなっておられた。親子で一緒に絵本を楽しんでおられる姿を見ることができ、喜びを感じている。

さて、レファレンスの話だが、最近は便利になり、例えばパソコンで「乗り物が好きな2歳の男の子」と入力すれば、該当する絵本がずらっと出てくる。しかし、それには頼らず、自分の頭の中にその子の好きなもの、環境、話した内容などを個別に記憶していき、そこからレファレンスをするように心がけている。

［動画を音声なしで上映し、映像をみながら解説］

（オープニング・学生の読み聞かせの様子）ライブラリーは、絵本の表紙が見えるように並べてあり、子どもたちが手に取りやすいように配架している。

ここで学生たちは絵本を選び、小学校や幼稚園、おはなしレストランライブラリーで読み聞かせを行っている。学生は、子どもたちや保護者の方と絵本を通して触れ合い、絵本の読むことの楽しさ、挨拶や礼儀など、様々なことを学んでいる。

（司書が利用者と接している映像）日頃大事にしている声かけの様子も映っている。よく来てくださる方がインタビューに応じてくれた。

司書に会うのを楽しみにされていたり、絵本の種類や並べ方が気に入って来館される方もいる。赤ちゃんの時からずっと通ってくれている男の子は、おはなしレストランライブラリーに通うことで、絵本に親しむようになり、最近できた弟に読み聞かせをしているそうだ。

（学生へのインタビュー映像）読み聞かせの授業を受講している学生へのインタビューも紹介する。読み聞かせをするときに気をつけていることを話す学生、将来の夢に読み聞かせの経験が活きると話した学生、子どもたちと関わることによってコミュニケーション力がついたという学生もいる。

（定例行事の映像）わらべうたに親しむ「わらべうたゆりかご」という会の様子で、毎月第2木曜日の10時半から行っている。特に小さい子どもたちの参加が多い。また、毎週日曜日11時から、学生が読み聞かせをする「おはなしのじかん」があり、この時間を楽しみに来館される利用者も多い。

（エンドロール）絵本との出会いはもちろん、人と人とが触れ合う楽しい空間になればと思っている。

動画は以上。

【おわりに】

最後に、本日お配りしている「おはなしレストランライブラリー利用統計」という資料をご覧いただきたい。来館者人数と貸出冊数のグラフを掲載している。平成30年度に数値が下がっているのは、学外開放が週5日あったのが、今年度から週4日に減ったことが原因ではないかと考えている。しかし、来館者の数も大事だが、利用者一人ひとりの表情をよく見て、利用者の個性を感じ取りながら、利用者と深く関わるようにしたい。これからも学生と司書がともに力を合わせ、利用者さんと一緒におはなしレストランライブラリーをつくり上げていきたい。

基調講演②

「おはなしレストランへようこそ～地域と大学・学生を絵本でつなぐ」

島根県立大学人間文化学部　学部長　**岩田　英作**

【はじめに】

島根県立大学に勤務し、おはなしレストランライブラリーという児童図書専門の図書館を学内に設置して10年程になる。本日はその歩みを振り返りながら話をしたい。その前に、昨日は動画の紹介が不調に終わったので、最初にこちらの動画を皆さんに見てもらいたい。

［動画上映］

どうもありがとうございました。この動画は、この大会での発表のために業者に頼んで作ったので、紹介できて安心した。

完成した動画を初めて見たとき、利用者が司書の2人のことを「先生」と呼んでいることがとても印象に残った。利用者にとっては司書の2人のことが、何か教えてもらう、支えてもらう、多分そういう存在になっているのだろうと思った。お父さんたちの利用も、今、確実に増えていて、いい感じである。ライブラリーについては、この動画に全て表現されていると言ってよい。上映もできたし、もう説明を終わってもいいと思えるほど、達成感を感じている。

さて、私の専門は近代文学で、児童文学は後から学び始めた。大学での日頃の授業も、例えば今日は太宰治の『人間失格』を読み、明日は『おおきなかぶ』を読むというように、自分の中では小説と絵本と童話を混然一体にしてバランスをとりながら、日々過ごしている。

本日は全国各地からお集まりいただいているので、島根にゆかりのある作品をまず紹介させていただく。多分皆さんもよくご存知の、長谷川摂子さんの『めっきらもっきらどおんどん』という作品である。長谷川摂子さんは島根県平田の出身である。数年前にお亡くなりになったが、これはとても人気のある絵本の一冊と言ってよい。［本をめくりながら］神社に御神木のような、うろのある大木があり、その辺りから子どもが不思議な異界に導かれていくといった話だ。平田には木綿街道という整備された古い町並みがある。その一角に、今でも長谷川摂子さんの御実家があり、道を挟んだ向かい側に宇美神社という神社があるが、その神社がモデルになっている。このほか、『きょだいなきょだいな』という絵本も長谷川摂子さんの作品である。

絵本だけでなく読み物では私の大好きな『人形の旅立ち』（福音館書店　2003）という作品もある。これは一般的には童話の部類に入っていると思うが、むしろ小説と呼んだ方がいいかもしれない。平田を含む出雲地方には出雲弁という独特の方言があるが、その出雲弁がたっぷりと出てくる。長谷川さんが生まれ育った平田の町の雰囲気がそのまますっぽり入っているかのような作品である。表題作にもなっている『人形の旅立ち』の冒頭はこう始まる。

“低い山をひとつ越えれば日本海というわたしの故郷の冬は、くる日もくる日も鉛色の空におおわれて、人々はびちょびちょした冷たいみぞれや、くるったように吹きつける粉雪や、ぼったりぼったり落ちてくるだんべ（ぼたん

雪）の下で、冬の暗さにじっとたえているのでした。”
ここ島根は、これからちょうど、そういう季節を迎える。

【松江市児童図書館トライアングル】

島根県の松江市に限定して話をさせていただく。松江市は人口20万ほどの地方都市である。松江市の中心部は、宍道湖から中海へ注ぐ川を境に、橋南・橋北と呼ばれる地区に分かれるが、どちらかというと古い町並みが残っているのが橋北で、JRの松江駅などもある比較的新しい町が橋南と呼ばれている。今、我々がいるのは橋北で、この会場から松江城が望めるが、お城の横には島根県立図書館があり、そこには「こどもしつ」という児童図書室が別室の形で置かれている。それから橋南側に松江市立図書館があり、さらに10年程前から、中心部から離れた南西方向におはなしレストランライブラリーができて、私は勝手に「松江市における児童図書館トライアングル」と呼んでいる。児童図書をそれなりに豊富に持っているこれらの3つの図書館が、松江市を中心とする地域の住民に対して、子どもの読書を支える形になっている。

【おはなしレストランライブラリーの沿革】

では、ライブラリーの沿革について説明するので、「おはなしレストラン関係の出来事」の表をご覧いただきたい。

最初は平成17年（2005年）に、私とマユーあきという女性の大学教員の2人が中心となり、学生のボランティアを募って、大学の近くにある松江市立病院という総合病院に入院している子どもたちに絵本を読むことから始めた。その頃、私にもマユーにも子どもができた。それまでは小説ばかり読んでいるような生活をしていた私だが、家内が子どもに絵本を読んでいるのを見たり、時々自分も読んだりするうちに、「絵本というのは結構おもしろいものだな」と、次第に絵本に惹かれていった。そして、入院している子どもたちも寂しいだろうから絵本を読もうかということになった。

病院というところはセキュリティーが厳重なので、簡単にボランティアを受け入れてもらえないことは承知の上で、当時小児科部長をしておられた田中先生のところへマユーと2人でお願いに行った。田中先生は、こちらが説明をしている間中ずっとしかめっ面で、苦虫を10匹ぐらいかみ潰したような顔をしておられた。途中から、これは無理だ、早々に退散しようと思っていたが、説明を終えた途端、「ぜひやってください」と力強く言ってくださった。表情と真逆な反応でびっくりしたが、そのとき田中先生がとても印象深いことをおっしゃった。先生は日々、お母さん方と向き合いながら、子育てに悩んでいるお母さんがいかに多いかということを痛感しておられた。「子どもとどう向き合っていいかわからないという悩みを抱えているお母さんが多い。ぎゅっと抱き締めてあげればいいのにね」とおっしゃった後、「学生さんたちが将来母親や父親になるときに、絵本を読んでやるようなことがしっかりとできる大人になってほしい。そのためにもぜひ来てください。」とおっしゃった。田中先生が、入院している子どもたちのことを思ってというよりも、ボランティアで参加する学生のことを思っておられたことに驚くとともに、とてもありがたく、先生への敬意を抱いた。

このような経緯で、入院している子どもたちに学生が読み聞かせをすることになり、20人ぐらいの学生がボランティアに手を挙げた。病院では、重い病気の子どもの場合は枕元まで行って読み聞かせをした。動ける子どもの場合は、ある程度集まってもらって読み聞かせをした。また、入院している子どもが少ないときには、田中先生の取り計らいで、生まれたばかりで保育器に入っているような赤ちゃんを学生に見せていただき、学生が感動して帰るということもあった。

学生たちが読み聞かせをすると子どもは喜んでくれたが、実は、読み聞かせをしている学生たちが非常に輝き始め、どんどん変わっていくのが手にとるように見えてきた。「絵本はおもしろい」「もっとやりたい」と、学生たちの目がキラキラしてきた。これは授業になるのではないかと、マユーと私は直観し、翌年には試験的に「読み聞かせの実践」という授業を当時の文学科で立ち上げてみた。「おはなしレストラン」という名称もそのとき考えついて、今日に至っている。

先ほど見てもらった動画の中のナレーションに、「透き通ったごちそうを子どもたちに届ける」という一節があったが、この言葉は宮沢賢治が生前に出した唯一の童話集『注文の多い料理店』の序文に出てくる。宮沢賢治は、自分の書いた童話を「透き通った本当の食べ物」と呼んでいて、そこからおはなしレストランという言葉を思いついて使っているのだが、食事付きの読み聞かせをしているところだと勘違いされる方もいる。また、この名前は既に雲南市の木次というところで使っておられて、真似をしたと言われた事もあったが、仲良くさせてもらっている。

平成20年度の時点で、実践先として幼保園のぎと乃木小学校が定着し、今も続いている。幼保園のぎというのは、島根県内では幼保園、こども園型の第1号の園である。乃木小学校は生徒が1,000名を超える、島根鳥取両県で最大規模の学校である。各学年が4クラスぐらいで展開されており、4×6で24クラス、そして「なかよし学級」なども含めたすべてのクラスで、毎週水曜日の朝8時過ぎから、学生が一斉に読み聞かせをするということをずっと続けている。

平成21年度（2009年）には、この授業の取り組みが文部科学省の「すぐれた大学教育推進プログラム」に選ばれ、財政面で転機が訪れた。それまでは、書店で一冊ずつ絵本を買い、スチール製の本棚に一冊ずつ増やすという細々とした取り組みだったが、まとまった支援を受けられるようになったため、おはなしレストランライブラリーをつくることができた。今の蔵書は17,000冊ぐらいになった。皆さんがお勤めの公共図書館と比べれば決して大きくはないが、スチール製の本棚に一冊ずつ増やしていったことを考えると、夢のような話だ。大学内部でもこの取り組みへの評価が高く、いろいろと予算上の支援をしてくれるため、今も継続して取り組むことができている。

ライブラリーを学外向けに開放したのは平成23年度（2011年）である。それから10年ほど経過している。もともと島根県立大学松江キャンパスというのは、前身の島根女子短期大学の時代から70年ほどは短大として存続してきた。しかし2年前に4年制大学が設置され、今は、短大部と四大部、計4学科が松江キャンパスにある。そして4学科すべての学生が絵本の読み聞かせの授業をとることができる、あるいは必修化しているため、キャンパスを挙げて絵本の読み聞かせに取り組んでいるといっても過言ではない。

【全国の大学附属児童図書館】

このように、大学の中に児童図書館があるというのは、全国的にも非常に珍しい。私が調べたところでは、全国の大学附属の児童図書館で今、機能しているのは5館

程度である。おはなしレストランのスタッフはそのうち5館を視察し、学んだことをおはなしレストランの運営に役立てている。

5館のうちで一番古いのは、1976年に開設された北海道の武蔵女子短期大学の児童図書室である。この大学は北海道大学と隣接している。英語教育を行う大学らしく、この児童図書室では、英語の絵本と日本語訳の絵本を並べて置かれているのが特徴である。それから、学生によるボランティア活動が盛んで、7種類のボランティア活動をすべて学生が運営している。昨日の事例発表について、皆さんから出された質問を私も読ませてもらい、ボランティアによる運営については公共図書館でも苦労があることを実感したが、大学では学生がいるということがプラスになり、目の前にいる若い人たちがやってくれるという点で非常にありがたいと思っている。

京都造形芸術大学にはとてもおもしろい「ピッコリー」という子ども図書室があり、ここも随分参考にさせてもらった。造形芸術大学だけあって、ただ絵本を読むだけではなく、工作などの催しを行うことで造形するという学びにつなげて、図書館運営をされていた。また、ここでも個人個人の子どもたちの記録をしっかりとっておられた。

うちのおはなしレストランも、昨日事例報告をした尾崎さんともう一人の司書の「司書力」で持っている。子どもたちに声がけをするということは最初から実行しているし、一人ひとりの名前や読書傾向まで把握するということも、これまで忘れずにずっと実行してきた。もう5年ぐらい前になるが、尾崎さんに覚えている子どもの名前を紙に書き出すように言ったところ、300人以上の名前が並んだ。顔も見ないでよくそんなに書き出せるなと感心した。私も学生とつき合っているが、学生の名前を300人分書けと言われても、多分書けない。おそらく尾崎さんの頭の中には、子ども一人ひとりについて、家族関係までも一体となって立体的にデータが蓄積されているのだろう。尾崎さんたちはこんなふうにして子どもたちのことを理解しようとしているのかと、昨日の事例報告を驚きながら聞いていた。ただ、これから先もずっと、2人の司書の頭の中にデータをどんどん蓄積していけるだろうか。また、職員の異動や交代があるときは、どのように継続性を維持すればいいのか。このような継続面での問題を解決するには、2人の頭の中に入っている子どもの情報を共有する術を考えなくてはならないが、個人情報なので取り扱いが大変かもしれない。話が脱線したので大学附属児童図書館の説明にもどる。

鳴門教育大学には、すでに退職しておられるが佐々木宏子先生が作られた絵本のデータベースがある。これは、つらいとか楽しいとか怒りといった感情、子どものいろいろな心の状態に関する絵本のデータベースで、そんなすごい偉業が誰でも利用できるように公開されている。

関東地方には多くの大学があるが、山梨大学以外で目立った活動をしている児童図書館はなさそうだ。

大阪の高槻市にある関西大学の児童図書館では画期的な取り組みが行われている。大学職員と高槻市の職員が一緒に働いて、児童図書室を運営している。それから、ここでは司書が毎日朝10時頃から読み聞かせをしている。つまり、毎日ニーズがあって、お子さん連れの方が毎日たくさん来られる。それには高槻という市の事情がある。私が数年前に高槻市を訪れたとき、駅前に高層のマンションが建ち、どんどん開発が進んでいるような感じだった。そうなると、若い夫婦連れをはじめ多くの人が高槻に移住する。しかし、それに対応するだけの保育所がまだ整っていない。待機児童組がたくさんいて、そういう方々が児童図書館で過ごすという構図になっているようだ。市内のいろいろな子ども図書館と、関西大学の児童図書館が連携をし、どこで借りてどこで返してもいい「まち

ごと子ども図書館事業」という仕組みもつくってある。行政と大学との連携の参考になる試みだ。なお、高槻では「読みメン」という、お父さんたちの読み聞かせも盛んに行われている。

【読み聞かせを通した教育目標】

大学が附属図書館を置く第一の目的は、研究のための書籍をストックすることである。文科省では、大学の設置基準で学部別の蔵書冊数も定めている。ちりが積もって、いつ誰が開くのかわからないような本も貴重な資料として蓄えているので、どこの大学図書館も、今、満杯状態で大変なようだ。一方、おはなしレストランライブラリーというのは研究のための図書館ではなく、第一義は、学生に読み聞かせの教育をするための図書館である。それに加えて、一般の方々へも開放するという建前になっている。教育目標では、知識、技能、実践、この3つを総合した「人間力」を育成するとしているが、単に読み聞かせがうまくなれば良いのではない。絵本や人間に対する知識も深め、対面でのFace to Faceのコミュニケーションスキルも身につける必要がある。携帯電話の小さな画面の中で人とつながるのは得意だが、対面で目と目を合わせて話をするのを苦手にしている学生が多い。それは学生のせいというより、いまの時代がそうなっているからであり、大人にも言えることかもしれない。だから学生たちには、読み聞かせをして子どもたちと向き合い、生身の人間と向き合う力をつけてほしい。

それから、社会性や倫理観の育成も目指している。例えば学生が小学校に行く場合、サンダルでやってくる学生もいるし、玄関でめちゃくちゃな靴の脱ぎ方をする学生もいる。大学でそんなことまでと思われるかもしれないが、あえて靴を脱ぐところから指導している。それから、校内で子どもに会ったら自分から先に挨拶をしようとか、返事をしてくれない子どもがいてもめげずにちゃんと自分から声をかけよう、といったことも言っている。単に読み聞かせをすればよいのではなく、それこそ尾崎さんがライブラリーに来た子どもたちにはまず挨拶をするのと同じで、気持ちよく笑顔で挨拶することから対面コミュニケーションが始まることを学んでほしい。

読み聞かせをしに行くと、学生たちは子どもだけでなく、先生方とも向き合うことになる。先生にもいろいろなタイプの方がいて、読み聞かせに関心のある先生もいれば、学生が読み聞かせをしていてもずっと窓の外を眺めている無関心な先生もいる。でも、無関心な先生がいてもめげてはいけない。そこで生きる力がつくのではないだろうか。人間力というのは、世の中を知ることによって身についていくものなのではないかと思う。

【松江キャンパスの読み聞かせ活動】

毎年120人以上の学生が読み聞かせの授業を受講しているので、一年間で1,000冊以上の絵本を読み聞かせていることになる。一週間のうち大体一日おきに読み聞かせの実習がある。定期的に訪問しているのは4カ所で、月曜日は幼保園のぎに行き、水曜日は乃木小学校、金曜日には忌部小学校、日曜日はおはなしレストランライブラリーというスケジュールになっている。忌部小学校は1学年20人ぐらいで、読み聞かせには最適な規模である。私も毎週行っているが、子どもたちは私のことを「お姉さんお兄さんと一緒にくる変なおじさん」としか思っていないらしく、面白いので正体を明かさず「英作おじさん」で通している。「英作おじさん」と声をかけてもらうと一週間のつらさも忘れられる。自分にとっても、ほんわかとした時間が過ごせるとても大事な時間になっている。本拠地であるおはなしレストランライブラリーでの読み聞かせは、2人でペアになり、日曜日の11時から30分間、わらべう

たや手遊びも交えながら行っている。授業の場合と、学生サークルで担当する場合があり、ローテーションを組んで実施している。

このほか「出前シェフ」といって、コミュニティセンター（公民館）やショッピングセンターなど、学外から読み聞かせの依頼を受けて行う活動もある。これは、読み聞かせというよりショーに近いものになることもある。

また、中学校、高校、養護学校などにも出かけることがある。一般的に養護学校の子どもたちと読書は結び付きにくいイメージがあるかもしれないが、意外に需要がある。全国では学校司書の配置が平均6割程度だが、島根県と鳥取県はほぼ100％達成されていて、全国的にも突出している。当然、養護学校にも学校司書が配置されてはいるが、なぜか勤務時間が短い。養護学校の子どもたちも、読み聞かせをすると彼らなりの感覚で楽しんでくれる。それから、老人施設等でも読み聞かせを行うことがある。昨日、松本なお子氏の講演で昔話の良さについても触れられたが、昔話の絵本をおじいちゃんおばあちゃんたちに読み聞かせをすると喜ばれる。

「出前シェフ」での私の役割は、車の運転である。車に学生と絵本を乗せて、出前先に届けて帰ってくる。私が運転している間は、学生は疲れ果てて、後部座席で口をあけて寝ていたりするので、私はまるで学生のアッシーのようである。金沢には玉川子ども図書館という全国一の規模の児童図書館があるが、金沢まで車で出かけたときは最もつらく感じた。だんだん年齢を重ねて運転するのが大変になってきたこともあり、最近は「出前シェフ」は減らしている。

【おはなしレストラン　親子で楽しむ絵本10か条】

「おはなしレストラン　親子で楽しむ絵本10か条」は、皆さんにお配りしているおはなしレストランライブラリーのパンフレット裏表紙に載っているので、そちらをお読みいただきたい。昨日の尾崎さんの事例報告について、読み聞かせの授業の方法に関する質問が出ているのを私も拝見させてもらった。学生たちには、親子向けのものとは少し内容が違う「おはなしレストラン10か条」というものを配っているが、読み聞かせの授業はそれに基づいて行っている。技術的なことにも言及しているし、読み聞かせをチームで行う場合は協調性を大事にしようとか、挨拶も大事だとか、そういったことを10か条にまとめてあり、それがそのまま取り組みのポイントであるといえる。教材としては、絵本の解釈ノートなど、3種類のノートを使っている。まずは絵本の解釈をして、読み聞かせの計画を立て実行し、チェックをして課題をみつけ、改善して次の実践に向かうという、PDCAサイクルを繰り返している。

「親子で楽しむ絵本10か条」のなかで一番大事なポイントは、3番目の「大人みずから絵本を楽しもう」であろう。このことは、昨日の松本先生のお話とも重なる。まず自分が楽しむことなくして、読み聞かせをすることはできないだろう。例えば誰かにいい絵本だから読むようにと勧められても、その絵本の良さを自分でも感じて楽しんで読まなければ、子どもに楽しさが伝わるはずはない。本学では保育士も養成しているが、特に、保育士を目指す学生は「どうすれば子どものためになるか」とか「子どものための読み聞かせとは何だろう」などと、ついつい前のめりになってしまう。そういう学生には、まず自分の心で絵本を感じることが大事で、その次に子どものことを考えるようにと指導している。いろいろなおすすめ絵本を参考にするのも大事なことであるが、それぞれ一人ひとりのおすすめ絵本があっていいはずだ。マイベスト絵本を10冊選ぶとしたら、AさんとBさんとがそれぞれの心を反映したそれぞれの10冊を選べばよい。だから、学生にはおはなしレストランの基本スタンスをあまり押しつけないようにしてい

る。なかには、「先生、これ3歳の子どもにどうですか？」などとすぐに聞いてくる学生がいるが、良い悪いは答えずに、「自分でまず考えてみよう、自分ではどう思う？」などと返すようにしている。まず自分で考え、時には失敗しても、それは学生にとっては糧になる。実際に失敗することもある。例えば学校側から、「朝からこの絵本を読まれるのは……」と言われたりすると、スタッフがフォローに回る必要が生じる。試行錯誤をしながら取り組んでいるが、まず自分で考える力をつけるということが、ほかの学びも含めて、大事なスタンスだと思っている。

あと、10か条1番目の「絵本はおっぱいだ」というのは、昨日の光市立図書館の林さんの話と重なるが、絵本の読み聞かせはその内容以前に、言葉をかけてもらったり自分と向き合ってもらえるだけで、子どもにはすごく満たされた時間になるというようなことが書いてある。あまり敷居を上げると、特にお父さん方は尻込みしてしまわれるので、まずは読んであげてほしいということだ。公共の図書館などで絵本をパッと借りていろいろ読んでいると、すごく好きだと思える絵本が見つかるかもしれない。絵本は結構高価なので、購入して家計を圧迫してもいけないから、図書館と書店をうまく使い分け、繰り返し「読んで」と子どもが求めてくるような、そういう絵本は購入してストックしていき、自分の家に本棚ができるとよい。

【学生の感想】

いろいろ実演をして、最後にまとめをするときに、学生たちはいろいろな思いを伝えてくれる。「絵本ってすごい力を持っていると改めて思った」、「もっと自分の知らない本に出会いたい」、「子どものときに出会う絵本はきっといろいろなものを与えてくれる」など、絵本の知識や理解、実践についての感想が書かれていた。コミュニケーションについての感想もある。保育士を目指す学生には最初から子ども好きが多いが、そういう学生だけが受講しているわけではなく、子どもが苦手だったり、人と話すのが苦手な学生もいる。大学に入って高校までの自分を変えたい、苦手意識を克服したいという動機で授業をとる学生もいる。それから、「読み聞かせに対して真剣でなくてはだめだと思って頑張った」とか、「感謝の気持ちを込めて挨拶することが大事だと思った」など、社会性や倫理性についての気づきもある。

大学では当然、授業評価を行っており、それぞれの授業について学生の満足度が一覧データで出てくる。この読み聞かせの実践の授業は10年近く続いているが、幸い、学生には非常に好評で、やってよかったという達成感を持つ学生が多いようだ。本日の参加者の中にも、かつてその読み聞かせの授業やゼミを受講し、今は司書として活躍している方もいるので、また感想を聞いてみたい。

【紙芝居、わらべうたの楽しみ】

読み聞かせ以外にも、おはなしレストランライブラリーの特徴を幾つか取り上げたい。一つは紙芝居だ。実は、昨日からこの研究集会で紙芝居という言葉はあまり出てきていないが、皆さんの公共図書館において、紙芝居というのはどういう存在だろうか。絵本よりも紙芝居を重視しているという図書館はあるだろうか。まず絵本があって、紙芝居も置かれてはいるが絵本のように面出しされることもなく、一角で縦にずらりと並べられているイメージではないだろうか。紙芝居の存在が目立たないのには、歴史的な理由もある。戦時中に戦争高揚のプロパガンダとして国策紙芝居というものが使われており、その反省から、戦後は紙芝居の価値がぐんと下がった。そこにアメリカからギフトと称して『かもさんおとおり』や『ちいさいおうち』をはじめとする絵本がどんと入ってきた。今日では絵本が主流になっているが、紙芝居はもともと日本オリジナルで、

日本の伝統である。わらべうたと同じでこれを大事にしない手はないだろう。紙芝居の復興に尽力されている方もいらっしゃる。いま述べたような歴史的な背景もふまえ、ライブラリーではもう一度紙芝居の良さというものを見直してみたいと思っている。本日、扉のない簡易型の舞台を持ってきた。そして紙芝居といえば拍子木も必要である。紙芝居を読まれるときこれもぜひ使ってほしくて、おはなしレストランライブラリーでは一般の方に舞台と拍子木をセットで貸出をしている。この舞台という枠が、現実世界との境界になって集中できるのだろう。舞台があるのとないのとでは、子どものワクワク度も全然違う。さらに、紙芝居が始まるよと拍子木を鳴らせば、鬼に金棒である。これをぜひ家庭でお父さんにやってほしい。

昨日からこの会でもわらべうたのことが話題になっているが、おはなしレストランライブラリーでもスタッフの一人が中心になって毎月1回「わらべうたゆりかご」という会を開いている。わらべうたの会では、学生たちも読み聞かせのときとはまた違った表情を見せる。子どもに返るというか、満たされているような表情になる。それには本当に驚いた。私も、自分の子どもが小さいときには、わらべうたに参加するのがちょっと恥ずかしくてなかなかうまく溶け込めなかったが、今はわらべうたは本当にいいなと思う。どう言ったらよいのか、日本人のDNAに刷り込まれているのではないかと思うくらいすごい力がある。独特の音階に不思議な言葉の回し方、時々意味不明の言葉もあって、それを手ぶり身ぶりも合わせて受けとめていくという、何とも楽しい時間だ。

それから布絵本だが、これも尾崎さんに聞いたところ、やはり大人気のようで、小学生の子どもたちも喜んでいる。布絵本は、本来はバリアフリー図書、あるいは赤ちゃんのためというような位置づけだったかもしれないが、やはりそれ以上に楽しめるものなのである。

布絵本は市販されているものを購入することもできるが、スライド画面で紹介しているのは学生が手作りしたものの一部である。布絵本というのは、ページをバラバラにできるため、1ページずつ担当を振り分けて数か月かけて作る。それを最後にひもで束ねる。その瞬間、みんなで作ったという実感がわく。松江には布絵本づくりのプロフェッショナルがおられるので、その方の指導を受けながら学生サークルで作っている。作るだけでなく、布のメンテナンスも行っている。

最後に、大型絵本の話をしたい。今、ライブラリーでは市販されている大型絵本の8割ぐらいを所蔵している。一般の方に貸し出す余裕はないが、保育所などで複数の子どもたちに対して読み聞かせをするという場合には貸し出しをして、支援をしている。先ほどから演台の上に大型絵本を出してもらっているが、大型絵本のいいところは言うまでもなく、大きいということだ。『象の鼻』というこの本を開くと、どーんと象さんの鼻が出てきて、子どもたちはもうこれを見るだけですごいと喜ぶ。この圧倒感が大型絵本の最大のおもしろいところだ。このように、いろいろなものも生かしながら読み聞かせを楽しんでいる。

【おはなしレストランのゲスト】

それから、おはなしレストランではこれまでいろいろなゲストを呼んできた。谷川俊太郎さん、富安陽子さん、tupera tuperaの亀山達矢さん、そしてあまんきみこさんにもお願いして来ていただいた。学生も一般の方も一緒に、ゲストの方と忘れがたい楽しい時間をもつことができた。この取り組みは、お呼びするのにお金の面というより気合いが必要になる。コネがないから、手紙が唯一の手段で、「おはなしレストランってこんなところです」で始まるお便りを出して、来ていただいている。

谷川俊太郎さんにもお願いのお便りを出したところ、あ

る日、大学の研究室の私の部屋に電話がかかってきて、「谷川です、おもしろそうだから行きます」との一言で決まった。多分謝金の話などは一切していなかったが、そんな感じで来ていただくことになり、2日間にわたって楽しい時間を過ごすことができた。

tupera tuperaの亀山さんに来ていただいた時は、宍道湖畔で県立美術館とコラボをして「しんじこかいじゅう大作戦」というイベントを行った。宍道湖からもし怪獣が出てくるとしたらどんな怪獣だろうということで、集まっていただいた家族がそれぞれ一つ怪獣をつくり、それをみんなでかぶって記念写真を撮った。いろいろな怪獣がいておもしろかった。亀山さんはヤマタノオロチをデザインした怪獣を作ってくださったが、それは今おはなしレストランライブラリーの下駄箱の上に飾ってある。

あまんきみこさんはお呼びした時、すでに80歳になっておられた。学生の前で体を動かしていただくという無理なお願いをしてしまったが、快く応じてくださった。あまんさんの印象は、世の中にはこんなに優しい心の人がいるのかとびっくりするくらい、圧倒的に優しい人だった。あまんさんには、『ちいちゃんのかげおくり』の話をしていただいた。ちいちゃんは最後、戦争で亡くなってしまうのだが、当初ちいちゃんには死ぬ予定はなかったそうだ。生きて大人になって、恋をして結婚して子供ができて、そして自分の戦争体験を子どもに話すという、そんなストーリーで書こうとしておられたのに、「何度書き直してもちいちゃんは死んでしまうんです」とおっしゃったのが、すごく鮮烈な印象だった。何度書き直しても、作者の意図を超えてちいちゃんが死んでしまうので、しようがなく最後はそういう話になったとおっしゃっていた。戦争体験があまんさんの創作の根っこにあるということもとてもよくわかった。またどなたかお呼びしたいと思っている。

【しまね読みメンプロジェクト】

さて、時間も大分少なくなってきたので、島根読みメンプロジェクトについても話をさせてもらう。平成24年度から島根県と協力しながら、お父さんに限らず男性の読み聞かせを支援する試みをしている。成人女性の就業率は全国的に高くなる傾向だと思うが、島根県でも働いているお母さんが非常に多く、全国でもトップクラスの就業率だ。働いて家へ帰ってくるお母さんに、家事や育児を全部任せるのは大変だ。お父さんがビールを飲んで寝転がってばかりでは、お母さんがかわいそうだ。お父さんの中には、子育てにどう参加していいかわからない方もいるので、まずは絵本を読んでみるというところからやってみようということで声かけをしている。「読みメン3カ条」では「読みメンはイクメンの第一歩」ということを第一に掲げ、男性が絵本を読んで「読みメン」をするところからでも育児に参加すれば、家庭円満で子どものためにもいいし、お母さんにもプラスになる。

少しずつこの読みメンという取り組みも広がり、鳥取県や香川の坂出、大阪などでも共鳴していただいている。皆さんにもお配りしているが、「読みメン手帳」というささやかなものも作っている。手帳にはパラパラ漫画があったり、シールがついていて一冊読むごとにおしまいのページに貼るとか、お金のない中で工夫して作っている。「読みメン手帳」という名前だが当然女性が使ってもいいし、自分が読んだ本の記録をつけてもいい。どのような使い方をしてもよい。島根では6月を読みメン月間と決め、県内の公共図書館にこの手帳を配布して使ってもらえるようにしている。

スライド画面には、お父さんやおじいちゃんが子どもたちに絵本を読んでいる写真が並んでいるが、これらは平成27年度に島根県立図書館が主催した「キラキラしまね笑顔で読み聞かせフォトコンテスト」の読みメン部門に応

募のあった作品だ。ご覧のようなほっこりした写真がたくさん届いた。上半身裸のおじいちゃんの周りに子どもがたむろしている様子をとらえた作品が審査員特別賞をとった。

【ボランティア活動～震災と絵本～】

おはなしレストランではボランティアにも取り組んでいて、最後に震災のあった東北での支援の一つを紹介させてもらいたい。

陸前高田にある図書館の再建に、おはなしレストランライブラリーも関わった。古書をお金に換え、津波で壊滅した図書館の再建に役立ててもらおうと、2012年から13年にかけ、ライブラリーで約16,000冊の古書を集めて送り届けた。ちょっと時間が経ってしまったが、その取り組みの報告も兼ねて、今月の初めに陸前高田の市長を表敬訪問し、2017年に再建された陸前高田市立図書館に伺った。

スライド画面左上の写真は2012年にお邪魔したときに撮ったもので、このときにはまだ壊滅した図書館がそのまま残っていた。今はもう影も形もないが、グレーの世界というか、壁が全部むき出しになっていて、どうしてここまで破壊されてしまうのだろうというぐらい壊れていた。この写真をよく見ると赤いコーンが後方にある。ここは2階で、あのコーンの向こうに行くと落ちてしまう。もともとは壁があったが、水圧で壁が全部抜けてしまって、そういう状態になった。津波によって2階建ての陸前高田の図書館が全部すっぽり海中に沈み、水が引くときに洗濯機の中の渦みたいになり、それでもうボロボロになったという話だった。このときは陸前高田市立図書館で司書をしておられた長谷川さんという女性に案内していただいたが、赤い絨毯がひときわ目に焼きついた。そこは読み聞かせのスペースだったところで、「やっぱりここに来ると涙が出てしまう。その赤い絨毯のところで子どもたちに絵本を読んでいた」と、長谷川さんは泣きながら説明してくださった。

スライド画面の下の写真は、今月初めに新しい陸前高田の図書館に行ったときのものだ。今は商業施設と一体化した図書館が一つのトレンドかもしれないが、陸前高田でもそういう形になっていて、ショッピングのカートを引いたまま、すっと図書館に入れるような仕組みになっていた。この写真では町らしく見えるかもしれないが、実際陸前高田を広く見ると、この沿岸部の方はまだ至るところで重機が動いている。復興というのは本当に尋常なことではない。

新しくできた陸前高田の図書館では、ヤマタノオロチの紙芝居をした。ヤマタノオロチの紙芝居にはイザナギとかイザナミなどの神様が出てくるが、小さい子どもは聞いてくれるだろうかと思っていたところ、これが聞いてくれて、昔話と同様、ぐっと引きつける何か普遍的な力は神話にもあるのだなと感じた。特に2人の子どもがかぶりつき状態でとても熱心に聞いてくれた。震災後の図書館の状況を見ていた私にとってはとても感慨深い一瞬だった。

陸前高田にちなんだ絵本に『ハナミズキのみち』(金の星社　2013)というのがある。石巻では大川小学校の生徒が大勢亡くなり、その子どもを亡くしたお母さんたちが作った『ひまわりのおか』(岩崎書店　2012)というのがあるが、この『ハナミズキのみち』は、中学生の息子さんを亡くされた淺沼ミキ子さんというお母さんが作った絵本で、黒井健さんが絵を描いている。さわりのところを読んでみる。

“大すきな町。大すきなけしき。山の上から　町を見おろすと、松原のむこうに　海がきらきら　光っていた。大すきな家族。大すきな友だち。(途中省略)津波が来たとき、みんなが　あんぜんなところへ　逃げる目じるしに　ハナミズキのみちを　つくってね。”

こんな感じでまだ続いていく。これは、実際にあったことを浅沼さんというお母さんが絵本にした。石巻の『ひまわりのおか』もそうだが、お母さんたちが、先の震災の津波でお子さんを亡くされたことを絵本という形にしたいと思われたのはなぜだろうか。幸い私は経験してはいないが、多分親にとって子どもの死と向き合うことほど苦しいことはないだろう。それを絵本にするということは一体どういうことなのか。昨日の松本なお子さんのお話を思い浮かべると、「生き抜く力、生きる力」ということを強くおっしゃっていた。その言葉をそのままお借りしたい。多分お母さんにとってその絵本、その話は、生き抜くために必要だったのだと思う。お話というのは、困難を乗り越える力や生き抜く力をくれる。語ること、物語ることによってもらえる勇気というのも、きっとあるのだろう。お母さん方にとってはこの絵本一冊一冊がそういうものであり、切実に必要なものだったのではないか。絵本だけに限らず、お話と呼ばれるものをなぜ人は読み、語るのか。子どもの死と向き合うということを、そういうことにもつなげて考えていきたい。

話は以上だが、最後に皆さんと体を動かして終わりたい。皆さんにはご起立いただいて、２人１組になって隣の方とちょっとペアになっていただくとありがたい。

［全員ペアになり、大型絵本『だるまさんと』の内容どおりに動く］

最後は皆さんで、はい、ピース。

どうもありがとうございました。

全体会

パネルディスカッション

コーディネーター

島根県立大学人間文化学部　学部長　**岩田　英作**

パネリスト

山口県光市立図書館　司書　**林　由紀子**

鳥取県倉吉市立図書館　館長　**山脇　幸人**

鳥取県倉吉市立せきがね図書館　司書　**小谷　真央**

島根県立大学松江キャンパスおはなしレストランライブラリー　司書　**尾崎　智子**

岩田　この2日間の締めくくりとして、これから約1時間パネルディスカッションを行う。

昨日、皆さんから数々の質問を出していただいた。パネリストには一晩じっくりと読んで答えを考えていただいていると思う。時間に限りがあるため、まず3組のパネリストにそれぞれ15分程度お話をいただいて、残った時間で、会場からの質問を受けつけたい。

それでは、光市立図書館の林さんからお願いします。

林　質問の答えを用意しているだろうと思われた方は申し訳ない。昨日質問を全部読んだが、すべてに答えていると時間がなくなってしまう。詳細についてはメールでいろいろと聞いていただければと思う。

いただいた時間で、昨日話せなかったことを補足したい。その中に答えがあれば、それでよしとしてほしい。

私が司書として採用されたときの職員は、館長、係長、経理担当者と私の4人が正規職員で、あとはパートが1人、司書補の資格を持っていた嘱託職員が1人、その6名だった。その時にはもう、2年後の電算化が決まっていたので、すぐに機種選定が始まった。そして、業者が決まると、どのようにバーコードの入力を進めていくかを、新人だった私も一緒にしなくてはならなかった。司書の仕事もよくわからないという状態の中で、自分も勉強しながらだったが、分類は何版にするかなど業者と一つひとつ細かいところを決めていくときには即決を求められることが多く、随分鍛えられた。

そのときに、館長から児童サービスをお願いしたいと言われた。しかし、市内には先輩司書がいなかったので、すぐに山口県立図書館にあった児童読書研究部会に参

加し、先輩司書たちにおはなし会のやり方を聞いたり、語りをする方を紹介していただいたりと、本当にいろいろなことを相談した。どなたも、何も知らない若い子がよく聞いてくれたという感じでいろいろと教えてくださり、そのおかげで30年近くやってこられた。だから、図書館に正規で司書一人という方もおられると思うが、自館だけで解決しないことはよそとつながって教えていただくとよいと思う。

新しい事業に取り組もうとするとき、前例がないと言われるとなかなか手が出せないものだが、最近の私は「今から前例を作るいい機会ですよね」と言って、進めている。どういう効果があるのかは正直、やってみないとわからない。多少強引に進めることもある。本当に人に恵まれたと思っている。最近は児童図書館員という言葉が割と知られているが、30年前はまだ「児童サービスって何？」と言われながらのスタートだった。ただ、全国の先輩司書たちがいろいろなことをされているのを見て学び、真似をすることから始まっている。

先輩に直接お会いして聞くことのほかに、本も読んだ。松岡享子さんの『サンタクロースの部屋』、『クシュラの奇跡』、昨日も紹介した瀬田貞二さんの『幼い子の文学』、コルウェルの『子どもと本の世界に生きて一児童図書館員のあゆんだ道』などからも学んだ。どの本だったかわからないが、異なった団体に3つ入りなさい、児童サービスを始める前に基本の児童図書3,000冊を読みなさい、と書いてあったので、毎日基本リストを当たっては絵本を読み、また別のリストを見て、新しいものを見つけては次々と読んでいった。

おはなし会をスタートさせたときは1人で担当していたが、他市でボランティアをしていた方が手伝わせてほしいと入ってこられたので、2人ですることになった。2人になるとプログラムの良し悪しなどの感想を言い合えるし、自分が選んだ本に対して子どもたちがどのように反応していたかを他者の目で見てもらえるので、仲間づくりは大切だと思った。できれば職員の中に仲間がいるとよいのだが、みんなが同じ仕事をするわけにはいかないので、興味を持った職員や経験のある職員を加えながらいろいろなことをしてきた。

ストーリーテリングの会を立ち上げるのはハードルが高かった。覚えるという作業で自分自身が挫折しそうになったので、まずは語る人（ストーリーテラー）を育てようと語りの会を発足させた。それが今年で20年続いている。先々月そのことに気づいたが、あっという間だった。近々立ち上げ当時の講師をお呼びして、ささやかな会を開く予定である。その最初の講師が、続けていくためには図書館員が関わることと、何のためにするのか方向性を示すことが必要だと言われた。いろいろなボランティアグループを立ち上げてきたが、最初は私が加わって一緒に勉強などしていき、途中で興味を持った職員と入れかわるなど、必ず図書館職員が関わるようにしている。お互いに困っていることや、図書館の方針が伝えられる場をつくっておけば、今は予算がなくても、2、3年後を目指して頑張ろうというような話もできて、信頼関係も生まれる。業務が忙しくてすべて同席できない場合も、最初の挨拶か最後の2、30分だけでも顔を出し、光市立図書館から行事の案内などをするようにしている。

それから、講演や講座の参加者をお客さんにしないということにも気をつけている。興味があって参加されているのだから、参加者には何かに関わりたいという思いがあるはずだ。聞きに来て良かったとただ帰っていただくのではなく、「テーブルや椅子の片づけをお手伝いいただけますか」と声をかけて、できることから誘うようにしている。手伝ってもらいながら、行事の会場設営には人手が要るとか、本当は会場に花を飾りたいなどの事情を話していると、家から花を持ってきて飾ってくださるなど、できるこ

とをしてくださる方がいる。そういうふうにして仲間を増やしながら活動してきた。

岩田　そろそろ時間なので、続いて倉吉市立図書館の山脇さん、小谷さんお願いします。

山脇　昨日の事例発表に対して29人の方から質問をいただいた。ありがとうございます。まずは小谷司書の方から回答させていただく。

小谷　たくさんのご質問をありがとうございました。

＜YAボランティアの募集方法や運営について＞

ＹＡボランティアの募集は、職員手づくりのポップのほか、現在はボランティアが描いたイラストを使用して募集ポスターを作成し、それを図書館内に掲示したり、地元の中学校や高等学校に配布している。また、ヤングアダルト世代向けの情報誌『雨のち晴れ』の中でもよく募集をしている。資料として配布した『雨のち晴れ』60号の7ページをご覧いただきたい。「編集ボランティア募集の御案内」という記事のイラストは、いま活動しているＹＡボランティアが描いた絵で、ポスターにも使用している。

ボランティアの希望者はいろいろな思いを持って参加している。「本が好き」、「『雨のち晴れ』の表紙イラストを描いてみたかった」、「パソコンをもっと使えるようになりたい」、「部活で新聞部に入っていて記事を書くのが好きだから」などの理由に加え、「ボランティア経験をしていれば後々役に立つかもしれない」という思いで来る子もいる。そういう子が興味を持ってくれることがわかったので、ポスターや募集ページには、これに興味がある方は問い合わせてほしいと具体例を記載して呼びかけている。

＜初期のボランティアを募集したときのことを知りたい＞

経緯については『雨のち晴れ』2013年夏号（40号）に載っている。当館のホームページでPDF版も公開しているので、そちらも見ていただきたい。『雨のち晴れ』40号には、10周年記念として初代ボランティアへのインタビュー記事があり、ボランティアを始めた経緯も語られている。その初代ボランティアは本が好きで、図書館司書か記者になりたいと思っていて、母親から「図書館でボランティアでもしてみたら」と言われたことがきっかけで図書館に問い合わせをしたそうだ。ちょうどそのころ、図書館でヤングアダルト向けの情報誌が作れないかと考えていたので、担当職員とボランティアの話が合致して、『雨のち晴れ』が作られるようになった。タイミングが良く、とてもありがたいことだった。やはり出会いというのは大事だ。しかし、待っているだけでは先に進めない。中高生ボランティアの応募がない場合もあり、図書館の常連の子やボランティアをしてくれそうな子にこちらから声をかけたり、本を貸し出す際に『雨のち晴れ』を直接手渡ししたりもしている。そうすれば、やってみたいと言ってくれる子も出てくるし、現任のボランティアが部活の後輩などを紹介してくれることもある。『雨のち晴れ』の手渡しは、中・高校生だけでなく、小学校6年生ぐらいの学年の子にも時には手渡して、図書館ではこういう情報誌を作っていることを知ってもらえるようにもしている。

＜運営に関して、司書はどのような役割でどの程度関わっているのか＞

司書は、ボランティアの作業がスムーズにできるよう、いつ図書館に来て編集作業をするか聞いてパソコンの準備をしたり、『雨のち晴れ』の内容を話し合い冊子の台割りをまとめるなど、とにかくボランティアができない作業のフォローをしている。担当者にはほかにも仕事があるた

め、ずっとついていられるわけではないが、極力作業の様子を見て、わからないことはないか声かけをしたり、職員と中・高校生たちの距離を縮めようと、彼らに話しかけたりするようにしている。中・高校生は自分の好きなことに共感されると心を開いてくれやすい。例えばゲームが好きだったら、自分も調べてやってみてから話をするというようなことを心がけている。実際、中・高校生の間で流行っていると言われたゲームや動画サイトを見てみると意外とおもしろいので、こちらも楽しんで話ができた。それでも担当者一人だけでは対応し切れないので、他の職員にも協力してもらいながら行っている。倉吉市立せきがね図書館には職員が3人いるが、全員ボランティア対応ができるようにしている。ボランティア一人ひとりの名前や顔も覚えるようにしている。

＜『雨のち晴れ』の制作について、ボランティアのため流動的だと思うが、どのような工夫をしているか＞

まず、YAボランティアには、発行までにどれくらい時間がかかるのか事前に伝えている。書影掲載の許諾に時間がかかるとか、校正にどれぐらいかかるかなど、具体的に伝えている。それでもYAボランティアの方も忙しいときがあるので、締め切りなどはちょっと緩くしている。それから、書いてくれた記事やイラストを褒めて、やる気を出させ、また作ってもらえるように声かけをしている。

＜鳥取県出身の方へのインタビューはどこまでYAボランティアに任せているか＞

YAボランティアには、どんな人に話を聞きたいかなど案を出してもらったり、質問内容を考えてもらったりしている。依頼をする、礼状を送るというようなフォローは職員がするようにしている。質問内容はボランティアに自由に考えてもらっているが、以前のインタビュー記事などを参考に見てもらうので、似通った質問になりがちである。

＜YAボランティアには助言をしているか＞

インタビューのフォロー以外に、『雨のち晴れ』はWordで作っているので、Wordの使い方がわからない子に教えることもある。そのとき、図書館にあるWordの本を見せながら教えて、「図書館にある本は使えるな」と思ってもらえるように心がけている。

＜『雨のち晴れ』でイラストを描いてもらって紙面に載せる際、キャラクターものはNGのような決まりがあるか＞

イラストを投稿するイラストコーナーに関して、決まりは特にない。投稿者が馴染みのある利用者であれば、作品やキャラクターの説明を書いてもらうことがある。図書館にあるイラスト投稿専用のポストに何の説明もなくキャラクターもののイラストが投稿されているときは、職員やYAボランティアが、できるだけ説明を書くようにしている。ただ、『雨のち晴れ』の表紙イラストは、主にYAボランティアに描いてもらっているので、オリジナルの方がいいとこちらの希望を伝えている。

山脇　それでは、私の方からも回答をさせていただく。

＜中・高校生の利用が多いとにぎやかで困ることはないか＞

倉吉の場合は大人の利用者も非常に多いため、普段は中・高校生が騒ぐということはあまりない。ただし、3年生が大学受験に入るころ、今まで図書館を使ってない子どもが来るようになるとにぎやかになることがある。その場合、多い時には一時間ごとに館内を巡視するようにしている。そのうちに、子どもたちが図書館の使い方を学んで静かになる。

＜継続して活動してもらえる人材が十分に揃っているか＞

先ほどの小谷司書の回答とも関連するが、毎週土曜日は図書館に集合しており、学校をまたいでサークル化しているようだ。仲間になり、先輩・後輩になりという関係が発生し、口コミなどで広がっていき、次々に新しいボランティアが参加してくれるので大変喜ばしい状況となっている。

＜SNSの活用についてはどう考えているか、今後避けて通れないのではないか＞

まさにそのとおりで、SNSの導入というのはこれから必然であると思う。倉吉市立図書館も、来年度は一部予算を要求しようと考えている。紙ベースのアナログ媒体というのもとても大切だが、やはりSNSの導入はこれから避けられないと考えている。

＜YA編集ボランティアが、その後、図書館で活動できるような受け皿があるか＞

たくさんのボランティア団体を受け入れているので、受け皿になると考えている。また、絵本を充実させてPRを行い、将来子育てが始まったときに、また図書館を利用してもらえるような、そういう受け皿も準備したい。

＜YAコーナーはどのような場所に置かれているか＞

現在はカウンターの前で、入り口に近い場所にある。スタート時はカウンターから離れた場所に設置していたが、残念なことに、行方不明本が出るようになった。それで場所を変えたのだが、目立つ場所にあるため、よく利用していただけるようになった。

そろそろ時間なので残りの質問については、所属やお名前がわかっているから、メール等で回答させていただきたい。

岩田　ありがとうございました。それでは最後に、おはなしレストランライブラリーの尾崎さん、お願いします。

尾崎　たくさんの質問と温かい感想をいただき、ありがとうございました。

＜学生がどんなふうにライブラリーと関わりをもっているか＞

学生は基本的に図書館司書の仕事はしていない。貸出処理や返本などはすべて司書が行っている。ただ、当大学には学生図書委員会があり、夏休みに「おはなしマラソン」という、絵本のポップを10枚描いて提出した子どもにメダルをプレゼントするという企画や、冬休みには「図書館クイズ」という、子どもたちにクイズに答えてもらう企画を学生図書委員主催で行っている。それに関しては、学生図書委員から子どもたちに説明してもらうこともある。

＜選書やおはなし会のプログラムを学生はどうやって決めているか＞

岩田教授の話にもあったが、学生がすることに関してはすべて学生に決めさせている。それを必ずスタッフが一回以上は見るようにしており、そこでアドバイスをすることはある。場合によってはプログラムを変えてもらうこともあるが、岩田教授も言っていたように失敗も糧になるので学生にすべてを任せ、自分たちで考えさせている。

＜授業における司書の役割＞

司書は授業内で、学生に対して、読み聞かせについてのアドバイスを行っている。

授業の構成についても、授業スタッフとともに話し合い

ながら進めている。

＜経験の浅い方へのレファレンスにおけるアドバイス＞

私はレファレンスに対応するために、アンテナをいつも張るようにしている。書店にもよく出かけるし、返本や貸出、本の整理のときに必ず本のタイトルを見るようにして、そこで、それぞれの本をどういう子どもにすすめたらよいかを考えながら仕事をするようにしている。また、子どもたちに読んであげることも大切だ。子どもたちに読んで感じることがたくさんあり、それがあるから利用者や学生に返せるものがあると思っている。だから私は外にも積極的に出かけ、読み聞かせをするようにしている。また、人に絵本を読んでもらう機会はあまりないと思うが、学生に絵本の読み聞かせをしてもらうととても参考になる。絵をじっくり見て、学生の読んでいる言葉を聞くと、とてもワクワクしたり、ドキドキしたりすることができる。「子どもたちはこうやって聞くんだな」と感じることができる。皆さんにも絵本の読み合いをお勧めする。

＜子どもや保護者と話をするときに心がけていることはあるか＞

子どもたちには同じ目線で話すようにしている。かこさとしさんが「子どもさん」という言い方をされていたが、私はとても気に入っている。「子どもさん」と思いながら、尊敬の気持ちを込めて対応したり話をするようにしている。

保護者の方については、押しつけない、出しゃばらないということを心に置いている。よくある質問にトイレトレーニングの絵本はないかというのがあるが、「おむつはいつかとれるのに」と心では思いながらも、保護者の方は本当に子育てに一生懸命なので、絵本を紹介した後で、「私の息子も遅かった、大丈夫ですよ」と安心できるような声をかけるようにしている。本についてはなるべく、「この本読んでください」とは言わないようにしている。

＜一般の利用者にはどんな方が多いか＞

近隣の方が多いが、小学校や中学校、保育園などで読み聞かせボランティアをしておられる方がよく借りに来られる。そういう方々は、ちょっと離れたところからでも来てくださっている。保育士になった卒業生も絵本を借りに隣の出雲市から来てくれる。米子からわざわざ来てくださる方もいるが、ほとんどは松江市内の方が来てくださっている。

＜リピーターの割合はどれくらいか＞

リピーターの方もたくさんおられるが、最近、新規の方にもたくさん来ていただいている。今年度は夏休みが明ける頃に、松江市内の全保育園、幼稚園におはなしレストランの紹介のチラシを配布した。その後しばらく経ってから利用者に声をかけると、知り合いに聞いたという方がほとんどだった。口コミで広がって、新規の利用者に来ていただいていると思われる。

＜公共図書館との違い、おはなしレストランライブラリーならではの特徴はあるか＞

それはもちろん学生がいることだ。ほとんどの図書館では学生が読み聞かせをすることはないと思う。学生が空き時間に来て子どもたちと遊んでくれたりもする。それは大学内の図書館ならではと思う。

また、公共図書館は、図書館の一部に児童書スペースがあるというところが多いと思うが、おはなしレストランライブラリーは一つのスペースなので、子どもたちがちょっと声を出してもクレームなどは全くない。その点はありがたい。

全ての質問に答えられていないかもしれないが以上で

終わらせていただく。

岩田　ありがとうございました。一通り、3組の皆さんに質問の回答をしていただいたがもう少し時間がある。会場の皆さんで聞きたいことがある方は、挙手をどうぞ。

梶田　国立国会図書館国際子ども図書館の梶田です。倉吉市の取り組みについて、『雨のち晴れ』で紹介されている資料が幅広いので、編集委員の子どもたちは随分本を読むのだろうと感じた。これは司書の方から、新着本を薦めて感想を聞くというような働きかけをしているのか、それとも、選書も自発的に子どもたちがしているのか。

小谷　司書の方から薦めることはあまりない。子どもたち自身でテーマを選び、本を紹介している。ちなみに、ディズニー映画が好きな子に、グリム童話の本の紹介をしてみてはと助言をしたら、一緒にボランティアに入っているその子の友達も、「私もグリム童話を読んでみる」と、どんどん連鎖していったことがある。

梶田　ありがとうございます。

岩田　よろしいでしょうか。ありがとうございました。ところで、ヤングアダルトボランティアに参加しているのは、高校生が主体か。

小谷　中学生もいる。

岩田　自分の勝手な印象だと、公共図書館で中高生というと、利用の目的の最たるものは自習で、中間試験とか期末試験の前になるとやって来て席の取り合いになるとか、そういう光景が目に浮かぶ。こういう形で中高生が関わってくれる例は非常に珍しいことと思う。

　ではそのほかに、質問や意見がありましたらお願いします。では、どうぞ。

福田　島根県立松江工業高校の福田です。倉吉市立の2つの図書館では、とてもいい活動をしておられるが、学校との連携はしていないのか。松江工業高校では、島根県立大学のおはなしレストランの尾崎さんに大変お世話になっている。本校は、2年生が保育実習をするのだが、工業高校なので大半が男子である。そのため、1年生のときに家庭科ではなく国語の授業として尾崎司書に来てもらい、とにかく絵本を楽しんでほしいということを話してもらっている。倉吉市ではそのような連携をしておられるか聞きたい。

岩田　ありがとうございます。では、倉吉の山脇さんお願いします。

山脇　昨日も申し上げたが、学校との連携は一番大切なことだと思う。どんどん連携しているというわけではないが、高等学校との連携でいえば、学校司書あるいは大学図書館の司書と連携して、高校生や短大生が参加するビブリオバトルを何年か続けて行った。現在は単独で開催されているようだ。連携事業はとても大変だが意義は大きい。

　中学校との連携では、現在せきがね図書館が中心となり、周辺の中学校とも連携して、スタンプラリーを行っている。館種を超えて連携するのはとても大変だが、最も大きな柱になる試みで、大切だと考えている。

岩田　ありがとうございました。福田さん、よろしいでしょうか。

福田　ありがとうございます。

岩田　尾崎さんの活動の一面も紹介していただき、ありがとうございました。そのほか、質問はありませんか。

笠井　香川県土庄町立中央図書館の笠井です。ヤングアダルトコーナーのことについてだが、うちは利用者が少なく、中高生の子どもに読んでもらうといっても小さい町なので、誰が来ているかというのが見たらわかるような状態だ。実際、たくさん借りる子も決まってきているが、リクエストのある本はライトノベルなどが多くなってきている。自館では文庫本はあまり購入しておらず、リクエストを受け付けると少ないスペースにライトノベルが多くなってしまう。図書館として読んでほしい本と、今の子どもたちが読みたい本とのずれがあるのだが、それをどのように選書していけばよいのか悩んでいる。

山脇　おっしゃるとおりだ。中・高校生はライトノベルに強い要求を持っているので、図書館にライトノベルがあれば喜ばれ、利用されることはわかっている。しかし、だからといってライトノベルをどんどん書棚に並べるわけにはいかない。私たち大人には、どのように子どもたちを育てていくかという責任がある。図書館では、毎年収集方針を立て予算を配分して蔵書を構築している。中・高校生のニーズを考え、ライトノベルへのリクエストに応じることも多いが、お断りする場合もある。

笠井　ありがとうございます。もう一つ質問がある。『雨のち晴れ』に新着図書リストがあるのだが、ライトノベルと思われるような本も何冊か入っている。これらは希望が出たものを購入しているのか。

小谷　リクエストされた本は調べてみて、アニメ化されたり、人気が高いものについては購入することもある。

笠井　ありがとうございました。

岩田　ヤングアダルトサービスについて皆さんの関心が高いようだ。光市立図書館の林さん、ライトノベルの扱いについて何かコメントをいただけませんか。

林　光市立図書館では、文庫を積極的に購入対象としていないので所蔵数は少ない。ただ、当市の場合はヤングアダルト世代より高齢の利用者が多く、時代小説の文庫のリクエストがよくある。冊数の多いシリーズものの場合、出始めならよいが、既に何十巻と出ているものを1巻から揃えるのかというと悩ましいので、寄贈で受け入れることが多い。ボランティア活動協議会が実行委員となって実施している図書館まつりで、ブックリサイクルをしており、そこで文庫もかなり集まってくる。それを図書館に寄贈していただいている。それで抜けている巻の補充も行っている。今のところ中高生はひっそりと利用したいらしく、リクエストをしてこない。ニーズを吸い上げていないと言われればそれまでだが、自分で探して読んだり、東野圭吾などの大人向けの小説を読み始めていたり、今は何とかなっている。

岩田　ありがとうございました。では、次の方、お願いします。

岡野　神奈川県横浜市立南図書館の岡野です。光市

立図書館のブックスタート事業について聞きたい。ブックスタート事業を始められ、健診に来る親子に絵本を渡しておられると思うが、その際、本をただあげるだけなのか、何か声かけをしているか、あるいは司書がどんなふうに関わっているのか具体的に伺いたい。

林　光市では、健診時ではなく母子保健推進員が生後2か月の家庭訪問時に、おはなし会の便りなどと一緒に絵本を配ってもらっている。絵本は1冊しか差し上げられないが、その1冊は次のように選んでいる。まず、司書のほうで5冊程度に絞り、それを母子保健推進員の会合のときに紹介して、どの本を贈りたいか意見をもらう。その後、3課で決定する。図書館としては、絵本の紹介をするとき、どういうところが親子で楽しめるか具体例を挙げて説明して、その後はフォローアップになる。6カ月目から「ずくぼんじょ」や、子育て支援センターの未就園児のおはなし会など、絵本についての講演、講座に関する仕事がある。健康増進課には、妊婦が母子手帳を受け取りに来られるときに、事業のお知らせを配布してもらっている。関係課との連携体制があるのと、健診が個別健診になり、このような形をとっている。想像されているやり方と違うかもしれない。

岡野　ということは、2カ月児のみに配布しているということか。

林　そうです。

岡野　ありがとうございました。

岩田　横浜市ではどのように取り組んでおられるか。

岡野　当市では、財政的な理由でブックスタート事業は行われていない。自分の区では、4カ月児健診を集団で行っているので、必ずその場に出向いてわらべうたを紹介している。

岩田　ありがとうございます。市町村によって状況はいろいろあるようだ。では次の質問をどうぞ。

中川　岡山県鏡野町立図書館の中川です。2点質問がある。光市出身なので帰省するたびに光市立図書館を訪れている。林さんの話には出ていないが、光市立図書館では毎年「光高校生の選ぶ1冊」として、高校生のPOPを添えて、50冊か100冊か、数多く展示をしておられる、リストも作って置いてあるので大変参考になる。この取り組みの経緯をお尋ねしたい。もう一つ、倉吉市立図書館では中学校と連携してスタンプラリーが行われているそうだが具体的にどのようなことをされているのか知りたい。

林　高校生が作ったPOPの写真も、昨日のスライドに載せてはいたが、説明まではしていなかった。光市では、子どもの読書活動推進計画の策定時に、学校関係者や福祉関係者、ボランティア団体の関係者などから意見をいただく懇話会を3回程度開いている。その会議が終わってから担当者同士で話をしたとき、高校の関係者と「ぜひ何か一緒にできたらいいですね」という話になった。POPを作って図書館で掲示する機会があったらいいのにと、高校の先生から持ちかけられた。そういうことだったらお互い協力できるので、その場で大まかな段取りを決めた。図書館は掲示用のパネルを用意しておき、高校からは図書委員に来てもらって、張る作業を一緒にすることにした。事前にポップを受け取って、リストは図書館が作った。5、6人の高校生に来てもらって一緒に掲示すると

いうことを3年続けた。今年はビブリオバトルをしたいとのことだったので、POPの掲示はしていない。学校等は同じことをずっと続けるというより、新しいことをどんどんやっていきたいようだ。図書館はその要望にあわせて、ごく簡単なお手伝いを申し出て、実現につなげている。

岡野　では、あのPOPは50人以上の希望者が1枚ずつ描いたのか。

林　いや、朝読書の時間に1年生と2年生が取り組んだ。生徒は1学年140人くらいいるが、司書教諭の先生から図書館に100枚程度いただいている。

岡野　ありがとうございます。

小谷　せきがね図書館で行っている最寄りの中学校とのスタンプラリーに関して説明する。中学の学校司書から、公立図書館とコラボがしたいと持ちかけられたのがきっかけで、去年から始めた。絵を描くのが好きな図書館職員がいたので、プラ板のチャームがついたちょっとおしゃれなしおりとか、マグネットのしおりなどを景品にして、スタンプラリーをしてはどうかという話になった。スタンプカードには中学校で借りた分のスタンプも、せきがね図書館で借りた分のスタンプも必要というルールにして、両方の図書館を使ってもらえる工夫をした。

岡野　スタンプは、借りた冊数に応じて押すのか。

小谷　中学校では借りた冊数分のスタンプを押している。せきがね図書館では一度で10冊借りることもでき、すぐにスタンプがたまってしまうため、一度に何冊か借りた場合にスタンプを2個だけ押している。

岡野　ありがとうございます。

岩田　ありがとうございました。終わりの時間が近づいた。本日は昨日基調講演をしていただいた松本なお子先生もずっと聞いていただいていたので、ここで一言ご感想をお願いしたい。

松本　とても一言では言いあらわせないくらい、いろいろなものを私自身がいただいた気がする。特に、皆さんが、ご自分が住んでいらっしゃる地域のことをとてもよく知っておられて、地域をよくしようと活動されていることが伝わってきてとても感動的だった。お話を聞いていて、私も20年若返って、もう一回図書館で仕事がしたいと心から思った。

今日の岩田先生の報告も、大学がここまでできるのかと驚いた。私自身、地元の県立大学で非常勤講師としてストーリーテリングなどを教えているのだが、今回聞いた話を持ち帰り、私にも何かできることがないか考えてみたい。

今、図書館では人が減らされ、お金が減らされ、そして、やらなければいけないことはどんどん増えている。この状況は、全国どこでも同じではないかと思う。その中でも、こういうふうな活動をしている仲間がいるということは、大きな励みになったのではないだろうか。どうぞ無理をなさらず、楽しく仕事を続けていただきたい。ありがとうございました。

岩田　2日間をまとめていただきありがとうございました。時間になった。まだまだ聞きたいことがあるだろうが、そろそろ会のほうを閉じさせていただく。この2日間、「子どもとともに読書のよろこびを分かち合おう」というテーマで学んできたが、私たちはこの2日間、この同じ時間を過ごせ

た喜びを分かち合いたい。

本日のパネリストの皆様、それからご講演いただいた松本先生に、いま一度、盛大な拍手をお願いいたします。

ありがとうございました。

令和元年度全国公共図書館研究集会（児童・青少年部門）実行委員会

No.	区　分	所　属　・　職	氏　名
1	委員長	島根県立図書館　館長	新谷　伊子
2	副委員長	浜田市立図書館　館長	宇谷　　緑
3	委員	飯南町教育委員会　教育長　（飯南町立図書館　館長）	矢飼　　斉
4		松江市立中央図書館　館長	小林　久美子
5		邑南町立図書館　調整監	品川　淳子
6	事務局員	島根県立図書館　図書館支援課長	三田　憲昭
7		島根県立図書館　総務課長	高木　義晴
8		島根県立図書館　資料情報課長	石塚　弘文
9		島根県立図書館　子ども読書支援係長	坪内　珠美
10		島根県立図書館　子ども読書支援係　司書専門員	別所　聡美
11		島根県立図書館　地域支援係　司書専門員	河谷　さおり
12		島根県立図書館　総務課　企画員	増田　智則

発行：2020.3.31